土器群の編年的位置と地域性について

宮城県内における縄文時代後期前葉の土器群については南境式（伊藤信雄：1957）が一般的に用いられている土器型式である。

南境式の型式設定時にはごく少量の土器が示されたに過ぎず、これに対して当該期の土器群を数型式に細分し、南境式は型式設定時の資料に限定してその他のものは新たな型式名を与えようとする考え方がある。林謙作氏の袖窪式や後藤勝彦氏の宮戸Ⅰ（ａ・ｂ）式がそれである（林：1967、後藤：1957、1962、1967、1974、1981）。これらの考え方は基準となる資料が十分に提示されていないため型式の内容が必ずしも明確になっておらず、また後藤氏の場合には論文や報告によって各型式の内容が変更されて把握しにくいものになっている。さらに林・後藤両氏の場合には宮城県北部の遺跡から出土した土器を基準としているため、本遺跡のような県南地域の遺跡についてその型式を適用するには疑問が残る。

その後、伊東信雄氏は「宮城県史 34」(伊東他：1981)の中で、県内各地出土の多数の土器によって南境式の内容を明らかにしている。

したがってここでは全県的な資料をもとに設定された南境式を後期前葉の土器型式とする立場に立ち、その内容に本遺跡出土の後期第Ⅰ・第Ⅱ群土器の一部も用いられており、また第Ⅲ群土器は「宮城県史 1」の資料と類似する。したがって第Ⅰ～Ⅲ群土器いずれもが南境式に比定されるべき土器群と思われる。

次に、各群の土器をそれぞれの類例と比較検討することによって南境式内部の編年的位置と地域性を明らかにしていきたい。

第Ⅰ群土器

第Ⅰ群土器の類例を県内に求めると、白石市菅生田遺跡（丹羽茂他：1982）、柴田町向畑遺跡（芳賀寿幸：1983）、仙台市六反田遺跡（田中則和他：1981）、同梨野Ａ遺跡（田中則和他：1983）、宮城町農学寮跡遺跡（真山悟：1982）、鳴瀬町里浜貝塚袖窪地区（林謙作：1965）、色麻町大谷地遺跡（茂木好光：1984）、一迫町青木畑遺跡（加藤道男：1982）などがある。

このうち、菅生田遺跡の報文では向畑・里浜・六反田・青木畑遺跡出土土器群ともに南境式でもその初期に位置づけ、さらに宮城県内の北部と南部とでは器形組成に地域差が認められること、仙台市の六反田遺跡は基本的に南部地域に位置しながらも北部地域に近い特徴をも有していること、そして県北部はさらに岩手県南部まで、県南部は福島県にかけての、おのおのの地域的特性を有することが指摘されている。

第478図　向田遺跡出土土器

第479図　向田遺跡出土土器

ここでは菅生田遺跡の報文の見解をふまえ、さらに各地域における土器群のあり方を検討してみたい。

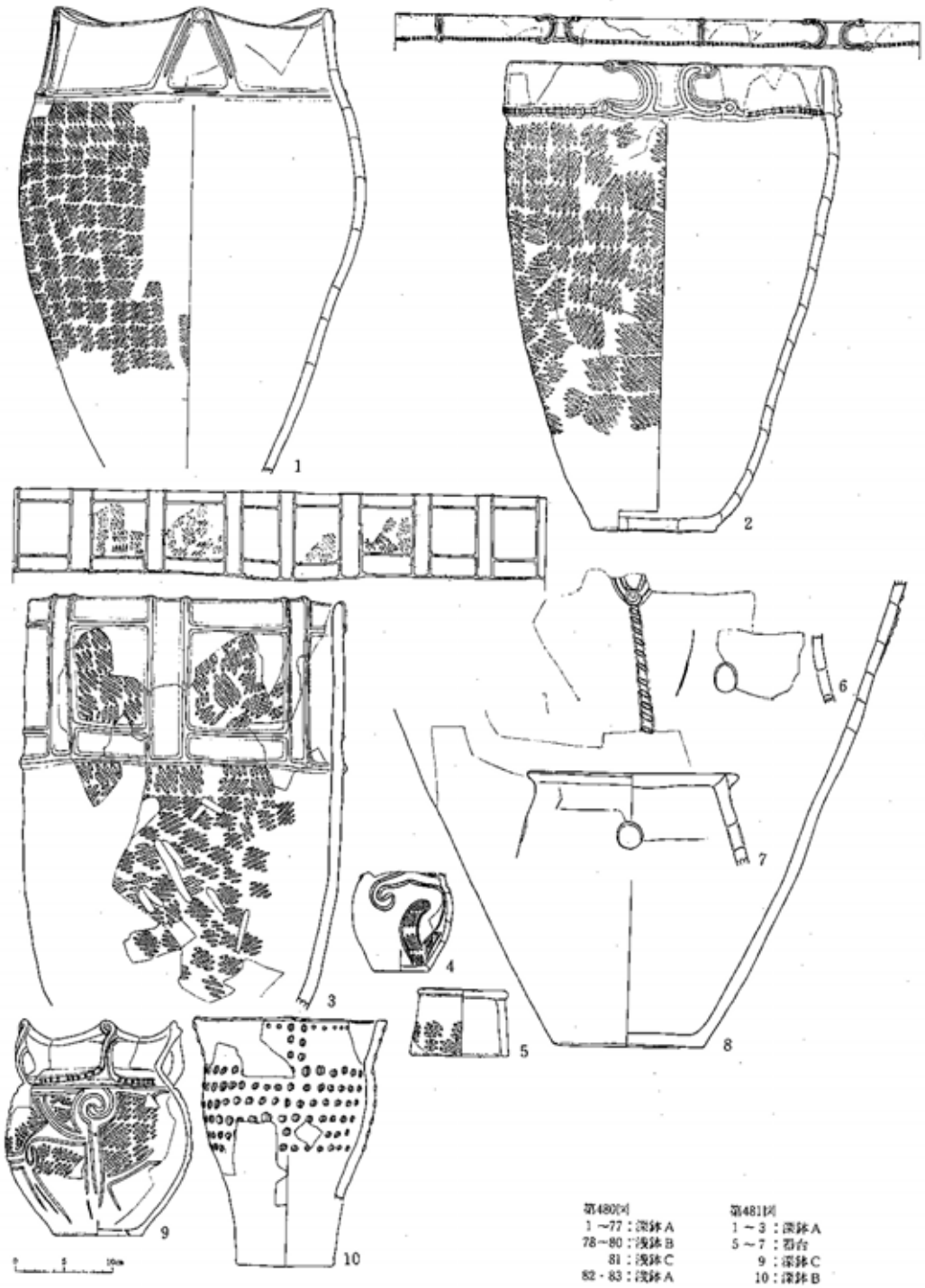
向畑遺跡

遺物包含層（第 2・3 層）から出土している。ほぼ第Ⅰ群土器同様の類を含んだ土器組成と思われるが、深鉢A類やD類はみられない。また第 2 層と第 3 層では、口縁部が直立する器形の口頸部文様などは共通するが、第 3 層には一部に刻目のついた隆線による方形区画文や、文様上下の隆線間を斜行隆線・沈線で区画する文様があり、胴部文様に隆線の用いられるものが主体的であるが、第 2 層ではそれが沈線主体となり、「J」字状文など第Ⅱ群土器第 1 グループに類似するものがみられる。

菅生田遺跡

主に遺物包含層から出土している。深鉢（A・B・C）、浅鉢（A・B）から成り、口縁部がほぼ直立する深鉢Aと外傾する深鉢Bが主体である。二屋敷遺跡の深鉢C・F・0 類と同様の器形と思われる。文様は器形の違いを越えた共通性が認められ、弧状・渦巻文のAグループ、それに強い関連性のあるBグループ、下垂線文・方形区画文のCグループに分かれている。向畑遺跡出土土器との共通点が多いが、方形区画文を描く隆線には刻目が認められず、また深鉢 0 IIIb1 類のような連結文様はみられるものの、第Ⅱ群土器第 1 グループと類似するものは遺物

第480図　菅生田遺跡出土土器



第481図　菅生田遺跡出土土器

包含層以外から出土した深鉢Cだけがあげられる。深鉢Cは把手から突起にかけての形態が異るものの、器形・胴部の連絡渦巻状文はともに深鉢HⅡａ類に例がみられる。

青木畑遺跡

遺物包含層から出土している。量的には少いが、深鉢は胴上部が脹んで口縁部が内反気味、内傾する器形（ＩＡ～ＩD類）と変化なく口縁部まで立ち上がるもの（ＩＥ・Ⅱ類）とがある。前者が主体的であり、隆線によって文様が描かれ、縄文や刺突文が充塡される。後者は一部刻目隆線や沈線で方形区画文などが施文されるものと、地文だけのものとがある。また胴部資料には連続刺突文が施される土器も含んでおり、二屋敷遺跡Ａ・Ｂ・Ｃ・0（Ｉ・Ⅱ）類等に共通する特徴を多くもっている。

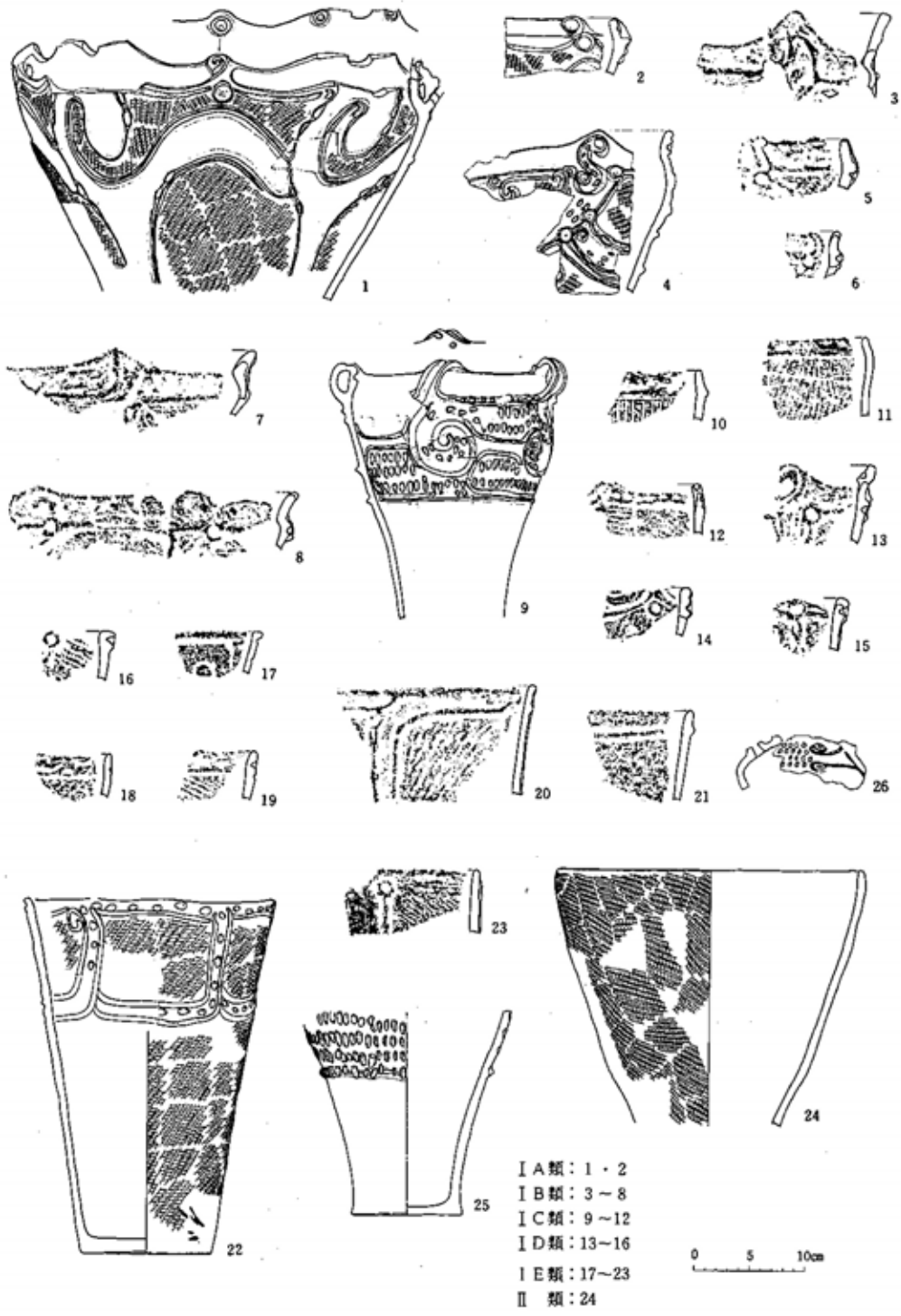
大谷地遺跡

遺物包含層から主に出土している。深鉢・浅鉢・注口土器があり、浅鉢と注口土器はごくわずかである。深鉢は5類（Ｉ～Ⅴ）に分けられ、口縁部が直立して変化の少い単純な器形（Ⅲ類）と頚部がゆるやかにくびれるもの（Ⅳ類）が主体を占める。このほかに胴上部が脹んで口縁部が外反するもの（Ｉ類）や胴中位に稜がついてそれ以上が外反気味に立ち上がるもの（Ⅱ類）や胴部が外傾して口縁部が内傾するもの（Ⅴ類）を少量含み、器形の組み合わせは青木畑遺跡と共通するものが多い。しかし、Ｉ類がごく少く、その器形は青木畑遺跡ＩＡ類よりは屈曲が少く、ＩＢ類に近い。文様が一部連鎖状隆線で描かれる点は同じである。全体的には沈線文様が多く、ⅣA類の渦巻状沈線文などは菅生田遺跡深鉢C類や二屋敷遺跡深鉢HⅡａ類（第Ⅱ群土器第1グループ）の連絡渦文に類似性が求められる。地文の細い撚糸文が目立つ。

以上の各遺跡のうち、県南地域に属する菅生田遺跡と向畑遺跡についてみると、向畑遺跡における第2層と第3層の出土土器の違いがあげられる。共通した類をもちながらも施文技法や方形区画文のあり方が異り、第3層出土土器の中に中期大木10式第Ⅳ段階（最終段階、丹羽茂：1981）の土器との識別が困難なものを含んでいる。さらに第2層出土土器には二屋敷遺跡第Ⅱ群土器第1グループと共通する類をもっており、第3層は第2層よりも古い土器群としての特徴が認められる。菅生田遺跡出土の土器は方形区画文や連絡渦巻文などからすればより向畑遺跡第2層出土土器に近い段階と思われる。

一方、県北地域についてみると、青木畑遺跡と大谷地遺跡の土器群の間に同様のことが認められる。青木畑遺跡ＩＡ類（　二屋敷遺跡A類）、一部刻目隆線による方形区画文が大谷地遺跡にみられないことや沈線文様が主体を占め、また渦巻文（　菅生田遺跡深鉢C、二屋敷遺跡深鉢HⅡａ類）の存在は、大谷地遺跡の土器群が青木畑遺跡のそれよりも新しい特徴をもつものと考えられる。

また県南地域と県北地域との比較をすれば、共通点は方形区画文が施される胴部中位に稜が



第482図　青木畑遺跡出土土器

ついてそれ以上が外反気味に立ち上がる類、頚部がゆるやかにくびれる器形、単純な器形と口縁部の「V」字状隆線文、連続刺突文が胴部に施文されるものなどがある。そして相違点は胴上部が脹んで口縁部が内傾、外反気味で一部連鎖状隆線による文様をもつ類の有無、単純な器形や頚部がゆるやかにくびれる器形に施される胴部文様の違い、地文では県北地域に細い撚糸文の目立つこと、などがあげられる。2 点目の胴部文様については、方形区画文は両地域にみられるが、それを除くと県南では渦状、弧状を基本とした文様であるのに対し、県北地域では胴上部で「八」字状を成す文様が主体を占めている。

これら両地域間の、共通点は同時期性を、相違点は地域差を現わしていると理解される。

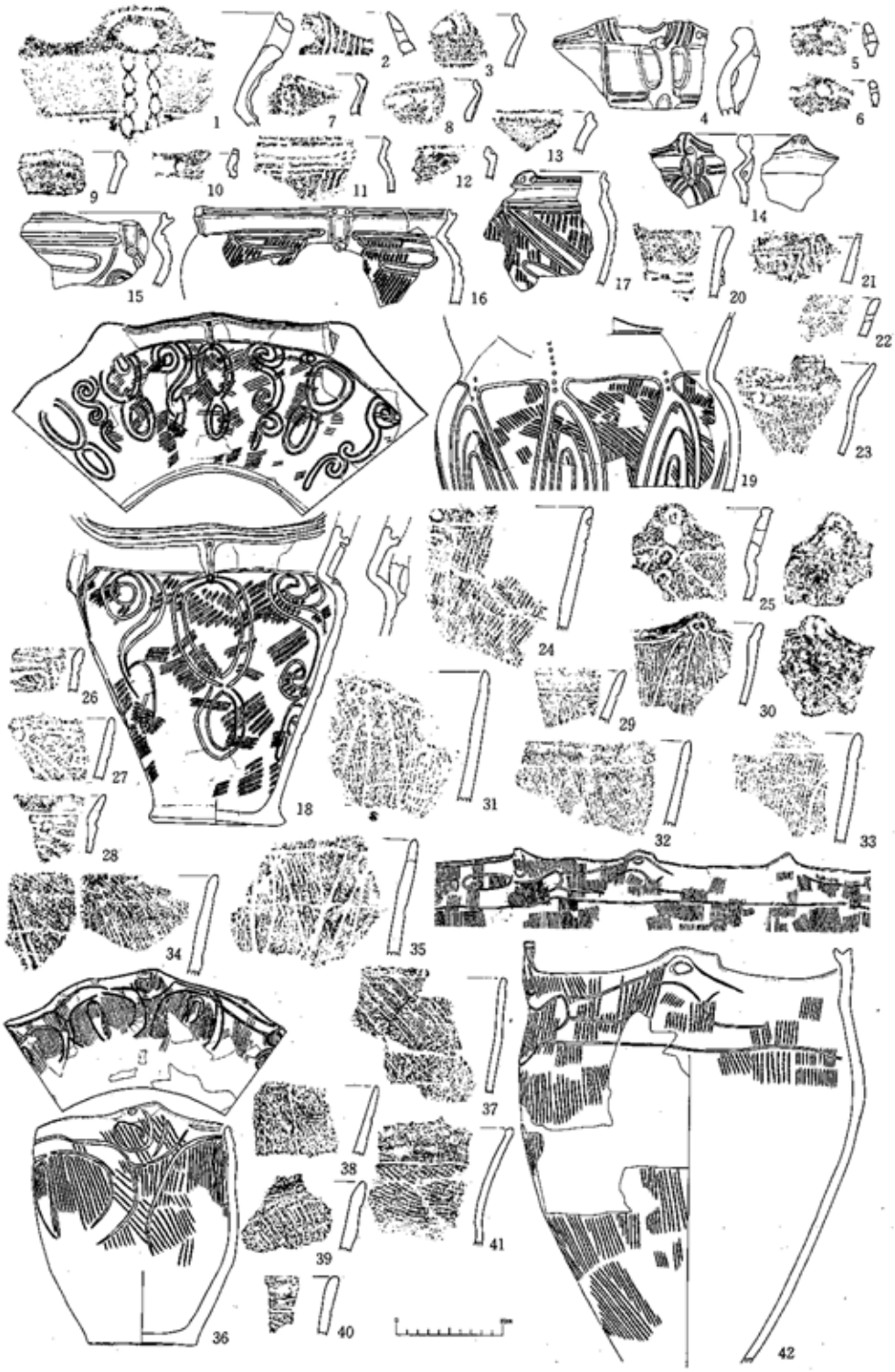
第Ⅱ群土器

第Ⅱ群土器に関しては、県南地域には前述の向畑遺跡などに類例はみられるが、まとまりがなく、比較すべき資料が乏しい。したがって第Ⅰ群土器の項で指摘した向畑遺跡第 2 層や菅生田遺跡出土土器にみられる第Ⅱ群土器第 1 グループとの類似性を中心にして年代的位置づけを検討する。

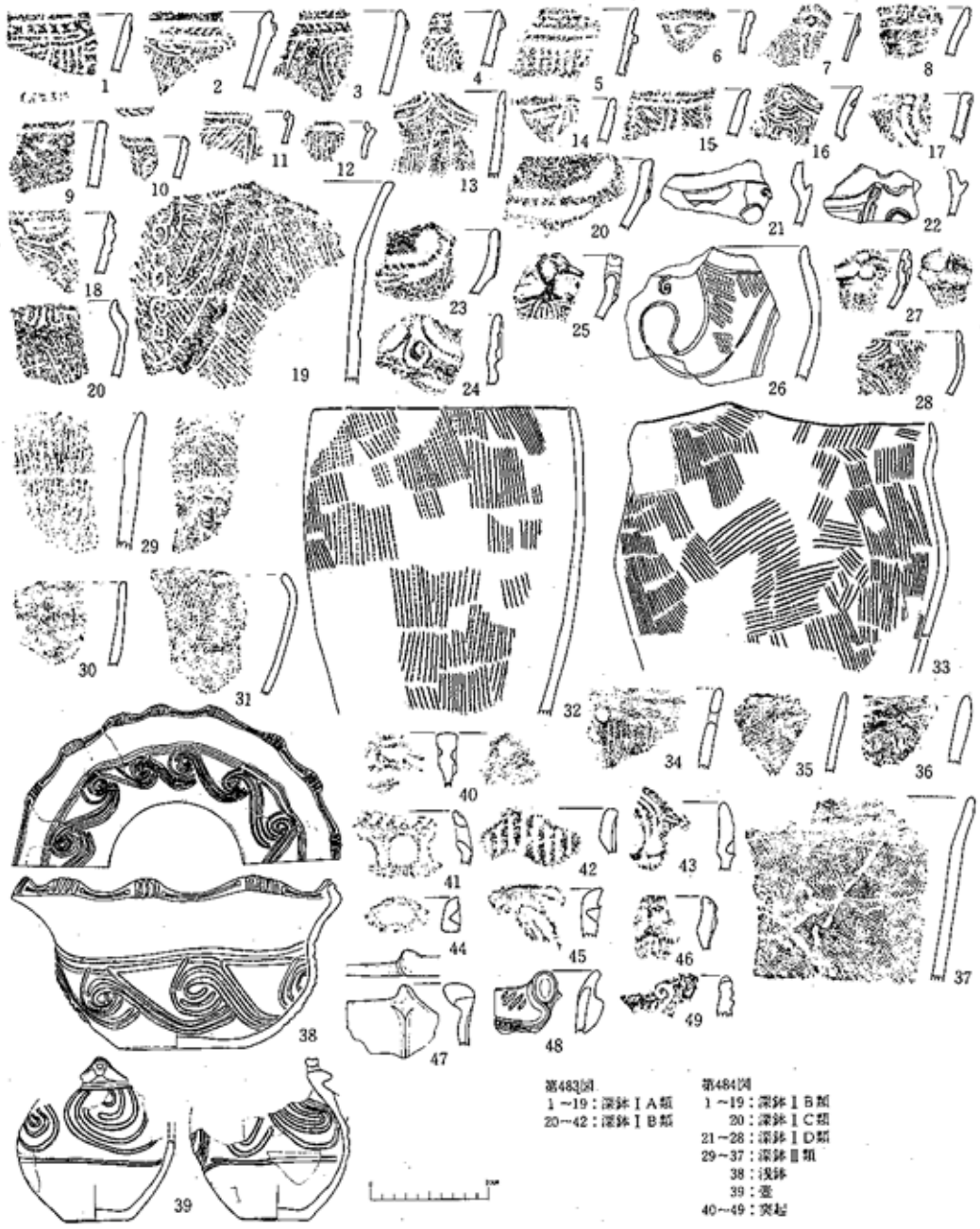
その類似性が最も表われているのは第 1 グループの深鉢 0Ⅲb2 類文様（ⅰ）と深鉢HⅡａ類文様(ⅰ)で、向畑遺跡からの引用第 479 図 21・22・24 が前者に、菅生田遺跡の同第 481 図 9 が後者の一部（第 471 図 4）に相当する。

深鉢 0Ⅲb2(ⅰ)類は縦位平行線の上部が円・半円・楕円・「U」字状になる文様で、単位が一連の沈線で描かれており、連結文様とした上部と下部が別々の小単位をボタン状隆線などで結んだ文様である深鉢 0Ⅲb1 類とは識別されるのであるが、単位形は似ており、また頚部に隆線の巡るものが多いことなどの共通点もみられる。深鉢HⅡａ(ⅰ)類の連絡渦文は渦から平行線が下る単位を斜行線で連絡しており、横位連結文的な要素と蕨手文に近い単位とで文様が構成されている。

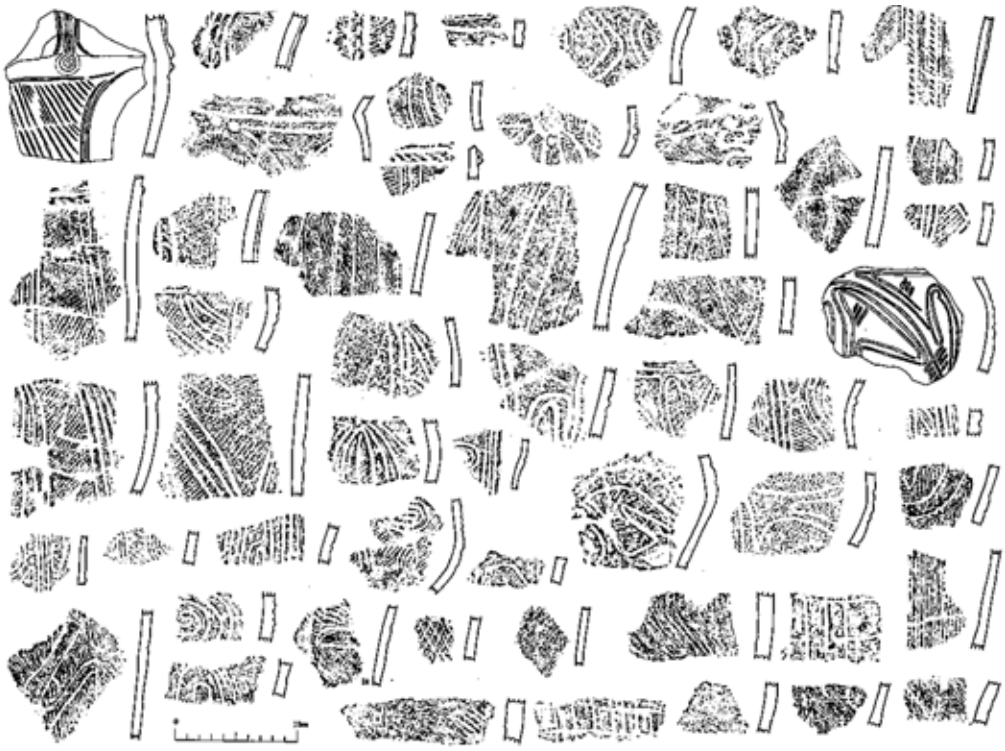
これらを含めて第Ⅱ群土器第 1 グループと判明した土器は、口縁部資料が 85 点で、第Ⅱ群土器に占める割合は 1.3%、また深鉢 0Ⅲb2(ⅰ)類が 0Ⅲb2 類の中では 19.5%となり、全体からみればごくわずかな量である。この種のグループが存在することは、第Ⅰ群土器から第Ⅱ群土器にかけての文様の変遷を理解しやすいものにしている一面があり、また第Ⅱ群土器の土器組成としてはその主体となる第 2 グループとともに古い要素をもつ第 1 グループが組み合うことは、遺物包含層中での一定期間内における土器組成としてはあり得る事と思われる。しかし、本遺跡の遺物包含層は 2 枚に大別され、各層の組み合わせに違いが認められない結果となっており、両層出土土器を含めた形での組成であるところから、層上面や、住居跡など生活面で一括出土した遺物に較べればかなり時間的幅の広い組み合わせであると考えなければならない。したが



第483図　金取遺跡出土土器



第484図　金取遺跡出土土器



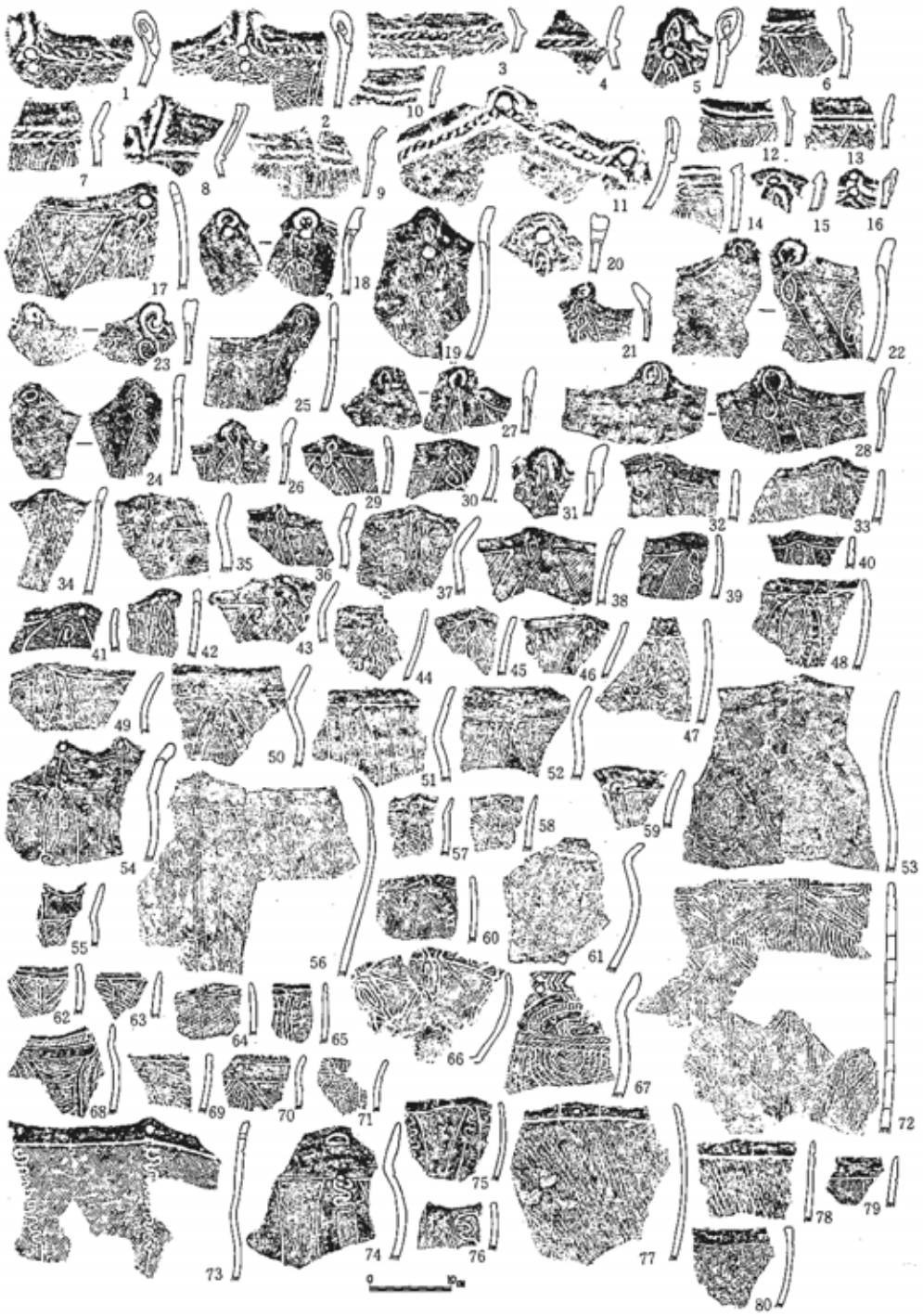
第485図　金取遺跡出土土器

って遺物包含層出土遺物としての第Ⅱ群土器は、その特徴を第２グループが現わしており、また包含層が形成された時間的幅に含まれるという意味で第Ⅱ群土器全体の組成が位置付けられる可能性がある。

一方県北地域で第Ⅱ群土器の類例を求めると、石巻市南境貝塚（後藤勝彦：1974）、大和町金取遺跡（小野寺祥一郎：1980）などをあげることができる。

金取遺跡

遺物包含層から出土している。深鉢の器形は頚部が「く」字状になる第１グループ、口縁部がほぼ直立する単純な器形の第2グループ、直線的に外傾する第3グループに分けられており、量的には第２グループが多い。この器形の組み合わせは二屋敷遺跡第Ⅱ群土器の主体を成す深鉢０・Ｈ・Ｍ類に共通する。また第１・第２グループの突起の形状、第３グループの口縁端部の形態はいずれも第Ⅱ群土器の中に含まれている。文様の明らかなものは少いが、第１グループの胴部には横位に展開する文様や楕円文・渦文などが、第２グループには円・楕円を基点とした文様や「Ｓ」字連鎖文を中心にした重層する懸垂文が沈線で描かれ、蕨手文もみられる。また第３グループには多条沈線による文様が多い。第１・第３グループの文様や第２グループの蕨手文は二屋敷遺跡第Ⅱ群土器とほぼ共通するが、第２グループの他の文様はむしろ前述した



A群土器　第1類：1～11　第5類：29～38　B群土器　第7類：54～56　第11類：77～80
第2類：12～16　第6類：39～53　第8類：57～61
第3類：17～20　第9類：62～72
第4類：21～28　第10類：73～76

第486図　南境貝塚出土土器

第487図　南境貝塚出土土器

大谷地遺跡との類似性が認められる。浅鉢はＣⅠ類、壺は注口土器Ａ類の器形に似ており、文様は多条沈線が用いられている。地文は撚糸文が目立つ。

南境貝塚

第一次調査、第四次調査の資料が示されている。Ａ・Ｂ・Ｃ群に分けられており、Ｂ群土器との共通性が強い。器形の組成は金取遺跡の３つのグループに二屋敷跡深鉢ＤⅡ類的な器形が加わっていると思われる。主な文様は小円を中心にした対称弧状文、平行沈線、下垂沈線の上部が連続「Ｓ」字状になるもの、蕨手文、ジグザグ文など縦長の単位、横位に展開する文様、多条沈線文様などで、地文は金取遺跡同様撚糸文が目立つ。

この両遺跡の土器群は共通点が多いが、南境貝塚ではＢ群土器より古い段階の土器群としてＡ群土器が位置づけられており、Ｓ字連鎖文・口縁部の８字状連鎖文・Ｓ字文・連続楕円文はＢ群土器にみられなくなるが、金取遺跡ではそのうちＳ字連鎖や胴部文様の基点に対称弧状的楕円文が認められる。そして、二屋敷遺跡とは器形組成と文様が大略一致するが、文様の一部や地文などに違いがみられる。文様の点では縦長の単位文様のうち小円や縦位平行線の上部が連続Ｓ字状になる文様は二屋敷遺跡に認められず、対称弧状文もごく少い。また口縁部装飾は沈線や盲孔によるものと、それに隆線や刻目・刺突も加わったより発達したものとの違いがあり、地文の撚糸文は二屋敷遺跡ではごく少い。これらの相異点は第Ⅰ群土器段階で存在した県北地域と県南地域との地域差がこの段階まで続いていることを示していると思われる。

また金取遺跡、南境貝塚の縦長単位の文様は、第Ⅱ群土器の１・２条沈線による縦長単位文様に対比される存在であると思われ、共通する蕨手文も認められるがその数は少く、第Ⅱ群土器では圧倒的多数を占めている点にも地域的特性が現われている。

第III群土器

第III群土器に類似した資料は、前述の南境貝塚（C群土器、伊東：1957）や西ノ浜貝塚（後藤勝彦：1965）、向畑遺跡からも出土しているが、まだまとまりをもった形での資料の提示が行われていない。したがって他遺跡との比較検討は今後の課題とする。

以上、二屋敷遺跡出土の後期前葉とした土器について、3 つの群ごとに検討を行った。その結果、各群はいずれも南境式に比定される特徴をもちながら、遺物包含層中での同時期性が認められる第Ⅱ群土器とそれより古い第Ⅰ群土器、新しい第III群土器それぞれに県内における類例を求めることができた。そしてその類例は県北・県南両地域にみられ、3 段階に分けることができる。

県南地域でみると、まず第Ⅰ群土器の類例である向畑・菅生田遺跡の土器群、次に二屋敷遺跡第Ⅱ群土器、さらに二屋敷遺跡第III群土器など、である。向畑遺跡や菅生田遺跡の例が南境式の中でもその初期の段階にあたることは、すでに菅生田遺跡の報文において指摘されているところであるが、向畑遺跡第 3 層・第 2 層の土器群にみられるように、この段階はさらに二分される可能性がある。またこの 3 段階は、二屋敷遺跡第Ⅱ群土器第 1 グループの一部と同じ特徴をもった土器が含まれていて土器組成に一部重複する類があること、二屋敷遺跡第III群土器などの土器群の内容がいまだ明確に提示しえないことから、南境式を細分した土器型式設定のための基準資料とするには無理な点が残る。したがって、県内地域における土器群の変遷ととらえ、仮りに向畑（菅生田）遺跡段階―二屋敷遺跡第Ⅱ群土器段階―二屋敷遺跡第III群土器段階としておく。

同様に県北地域においては、青木畑・大谷地遺跡段階―金取遺跡（南境貝塚B群土器）段階―南境貝塚C群土器段階とすることができる。南境貝塚A・B・C群土器について後藤勝彦氏はB群土器を宮戸Ⅰb式に、A群土器はそれ以前に、C群土器はそれ以降とし、C群土器が型式設定時の南境式と類似するところからその土器群を南境式と呼ぼうとする見解を示している（後藤：1974）。しかし後藤氏も述べられているように、A群土器はその分布範囲を「広義の門前式等も含めて、北は岩手県の中頃から南は現在宮城県中頃まで」とし、県南地域の土器は「A群土器やB群土器の一部とは相当の開きが観取される」ことからすれば南境式とは分布範囲が異っており、またB群土器の内容にA群土器からと関東地方からとの 2 つの異った伝統を受けたものが含まれているとしていることは、A群土器類似の土器群とB群土器＝宮戸Ⅰb式との関係が不明瞭であると言わざるを得ない。したがって宮戸Ⅰb式については南境式の時間的・空間的に細分化された型式である可能性は強いと思われるものの、現時点では上記のような位置づけを考えておきたい。また第 1 の段階は前述のようにさらに細かな変遷となることもありうる。

なお、袖窪式については、公表された土器の特徴をみる限り、青木畑・大谷地遺跡段階に属することが明らかである。

次に隣接県の状況について若干ふれておきたい。二屋敷遺跡後期前葉の土器の類例は福島県にも認められ、いわき市綱取貝塚（金子・和田：1968、馬目順一：1968）、大畑貝塚（馬目順一他：1975）、愛谷遺跡（馬目：1982）などが知られる。特にいわき市綱取貝塚ではC地点および第四地点出土土器によってそれぞれ綱取Ⅰ式、Ⅱ式が設定されている(馬目順一：1970、1977)。この中で第Ⅱ群土器と類似するものは綱取貝塚第四地点出土土器であり、第Ⅱ群土器第1グループの存在は明らかでないが、第2グループの土器組成にほぼ含まれる内容をもっている。ただ組成をなす各類の出土量では違いがみられ、綱取貝塚では第Ⅱ群土器深鉢HⅡ類などに相当する、口縁部の大きく外反するａタイプの器形が多数を占めており、また地文だけが施される土器がごく少いことなどがあげられる。しかしこのような頻度の相違が即地域差といえるかどうかわからず、それよりも「V」字状文など福島県から関東地方に多く分布する文様の描かれた土器をかなり含んだ綱取Ⅰ式土器の次に位置づけられる土器群であるという伝統の違いがあり、後期初頭にみられた宮城県南部から福島県という共通した土器の分布圏の中の細かな地域差が、第Ⅱ群土器の段階ではごく少くなっていると把えることができる。

また岩手県では、その南半部に、後期初頭の時期に宮城県南部と同様な地域的特性をもった土器が分布していることはすでに指摘されている（後藤勝彦：1974、草間俊一他；1971など）。類例としては陸前高田市門前貝塚（吉田義昭：1957、及川旬他：1974）、花泉町貝鳥貝塚（草間他：1971）、北上市八天遺跡（本堂寿一：1979）をとが知られており、青木畑遺跡、大谷地遺跡などとほぼ同様な土器組成をもっている。

第Ⅱ群土器段階には前掲遺跡からも出土しているが、まとまりをもった報告例は多くない。宮城県北部とを含めてそれ以南と比較してみると、前述した宮城県内における地域差が及んでいる一方で、深鉢HⅡ、M・0類などの基本的な器形組成だけではなく縦位の文様単位では蕨手文をはじめジグザグ文や連続S字文、また横位展開文様や多条沈線文様など共通性が多くみられる。これらの器形と文様が、少くとも宮城県南部では中期末葉から後期初頭にかけての系統から成立するものであることが明らかとなっており、両地域の土器群は一部に地域的特性を残しながらも、後期初頭の向畑（菅生田）遺跡段階、青木畑・大谷地遺跡段階よりかなり地域差は少くなっており、当地方の伝統の中から生まれたものと考えられる。

3. 縄文時代後期中葉の土器

後期中葉の土器は南側遺物包含層第 2 層と基本層位第Ⅱ層からごくわずかに出土している。南側遺物包含層から出土した土器については、層形成後に混入したものと考えられる。

深鉢形土器と浅鉢形土器があり、器形の違いによって前者は 5 類、後者は 2 類に分かれる。

深鉢形土器

Ⅰ類：口縁部・胴上部が直立するものである。胴部から口縁部まで屈曲なく立ち上がる単純な器形と思われる。外面に文様をもつものと無文あるいは縄文のみのものとがある。前者は胴上部あるいはまれに口縁部に数条の平行沈線が走り、下垂線や「S」字文で区切られることが多い。沈線施文後に縄文（帯状縄文）が施されるが、沈線文だけで地文をもたないものも少量みられ、口縁端部内面に沈線や刺突のみられるものもある。後者は口縁部に平行沈線文や一条の沈線が認められ、縄文が加えられるものもある。

Ⅱ類：口縁部・胴上部が直線的に外傾するものである。小さな突起がついて外面胴上部に平行沈線と下垂して区切る沈線が施され、内面口縁部に凹み状沈線とそれを区切るように突起から下る刻目のついた隆線、その下に平行沈線のみられるもの、鳥帽子状の突起がついて胴上部に菱形文をはさんだ平行沈線とその後に帯状縄文が施され、内面口縁端部に沈線が巡るもの、波状口縁で胴上部に平行沈線文、口縁端部内面に凹みが巡り波頂部には刻目の加えられるもの、外面縄文、内面口縁端部に一条の沈線が巡るものなどがある。

Ⅲ類：口縁部・胴上部が外反するものである。裾と内面に刻目のついた台形の突起がついて頚部に刺突隆線、胴上部に平行沈線文と帯状縄文、内面口縁部に平行沈線文が施されるもの、長楕円文と帯状縄文・内面口縁端部に沈線が巡るもの、外面は無文で内面口縁部に平行沈線文・端部に刻目の施されるものなどがある。

Ⅳ類：胴上位でくびれ、それ以上が内弯気味に外傾するものである。波状口縁を呈する。くびれ以上に平行沈線と下垂線、長楕円文、楕円文が施され帯状縄文が加えられる。くびれ以下は無文である。

Ⅴ類：頚部がくびれて口縁部が外反するものである。胴上部が内弯する。頚部に二段の列点刺突文、口縁部と胴上部に平行沈線文が施文されている。胴中・下部には縄文がみられる。

浅鉢形土器

Ⅰ類：口縁部が内弯するものである。全体に丸味をもち、底部も丸底気味である。器上部に平行沈線とそれを区切る下垂沈線が施され、帯状線文や磨消縄文（充塡）を用いるものと地文のみられないものとがある。また小破片では縄文をはさんだ 2 条沈線や文様が二段に認められるものもある。

Ⅱ類：口縁部・胴上部が直線的に外傾するものである。Ⅰ類より口径がかなり大きい。外面は無文で、内面器上部に長楕円文と端部に刻目、凹み状沈線、刻目・刺突隆線などが施されている。

これらの土器は横位平行沈線と帯状縄文にその特徴が認められ、金剛寺式(伊東信雄：1957)に比定することができる。

4. 土器以外の遺物について

土製品

土器以外の土製品には異形土器、筒形土器、蓋、袖珍土器、土偶、耳飾、土錘、円盤状土製品、管状土製品、香炉の破片と思われるものがある。円盤状土製品についてはすでに述べているので、ここではそのほかについて所属時期や特徴を検討する。

異形土器―1 点だけである。破片のため全体形は知り得ない。南側遺物包含層から出土しており、後期前葉（南境式、第Ⅱ群土器段階）の時期と思われる。

筒形土器―1 点だけである。2～4 条単位の平行沈線が 4 段に施されており、その特徴から後期中葉に属することが考えられる。

蓋―逆鉢形でつまみのつくもの、つかないもの、盤状のもの、皿形のものとがあり、いずれも大半は遺物包含層から出土しており、第Ⅱ群土器段階の可能性が強いが、多少特徴の異なったものがある。つまみのついた逆鉢形のうち連続刺突文が施されるもの（第 320 図 2・3）は第Ⅰ群土器深鉢Ｂ類の文様と共通するところから後期初頭（南境式、向畑、菅生田遺跡段階）と思われ、つまみのない逆鉢形は菅生田遺跡で出土した大木 10 式期第ⅡＢ段階の蓋とも類似している。またこれらの蓋は口径でみれば大形（第 220 図 1・4・6）と小形（そのほか）とに大別でき、土器の口径と比較すれば大形は壺Ａ類、注口土器Ａ類に、小形は壺Ｂ類と袖珍土器の一部に近い。

袖珍土器―深鉢形、鉢形、台付鉢形、壺形、注口付、台部破片がある。鉢形の第 323 図 1～4 は、1 が第 7 号住居跡に伴い、2～4 は第 6 号住居跡堆積土出土ではあるが、2・4 はその文様から大木 10 式期と思われる。台付鉢形は特異な形態をしており、平行沈線と帯状縄文が施されているところから後期中葉のものと思われる。このほかは遺物包含層から出土しており、第Ⅱ群土器段階と思われ、包含層以外から出土したものでも第 322 図 1～3・7・15 は施されている文様が第Ⅱ群土器に類似しており同時期と考えられる。また後期と思われる袖珍土器は無文の鉢形を除いてほぼ第Ⅱ群土器の各類を縮小した器形であり、文様も似ている。特に壺形は同じ器形の壺ＢⅡａ類が小形であり、大きさの違いが他のものより明瞭でない。無文の鉢形には

ごく小さく、突起部に小孔のつくもの（第323図9・10）があり、垂飾品とも考えられる。

土偶―遺物包含層出土のものは第Ⅱ群土器段階とみて特徴の異なる点はない。このほか第325図1～4、第326図2～6・8、第327図2・4・5は包含層出土品に類似、あるいは第Ⅱ群土器にみられる文様に似た装飾が施されており、同時期と思われる。第326図1はその文様から後期中葉のものと考えられる。

耳飾・土錘―大半が遺物包含層から出土しており、他のものも同様な特徴をもっている。第Ⅱ群土器段階に属すると思われる。

管状土製品・香炉の破片―第329図6を除き遺物包含層から出土している。4・5は細かな刺突が楕円形沈線文の内側に施されており、刺突文でみれば大木10式期から後期初頭と類似し、6の隆線文様も同じである。また3は鉤り手の可能性も考えられ、そうだとすれば深鉢GⅡａ類に分類される破片で、第Ⅰ群土器に含まれる。

以上、土製品は円盤状土製品も含めて、ほとんどが遺物包含層から出土しているが、中期大木10式期の竪穴住居跡に伴うものもある。また個々にみれば大木10式期や後期初頭の土器の特徴にも類似して、その特徴だけで時期を限定できないものもみられるから、遺物包含層における土器のあり方と同様に、古い時期の土製品が混入している可能性がある。

石製品

南北二つの遺物包含層から出土した石製品は、共出する土器の年代から、縄文時代後期前葉のものと考えられる。但し、土器の場合と異なり、それより旧い時期の微量の混入品を区別することはできなかった。

遺物包含層以外の箇所（各遺構、基本層位など）から出土した石製品については、その所属年代を特定することは困難である。しかし、それらの形態や石材などに見られる特徴から、大部分は縄文時代の石製品と考えられる。

したがって、ここでは、所属時期の明らかな遺物包含層出土の石製品について、各々の特徴を述べて見たい。

石鏃：基部形態から三類に分類した。各々の出土量を比較すると以下のようになる。

第1類：無茎で抉りのあるもの～55%

第2類：無茎で抉りのないもの～32%

第3類：有茎のもの　　～13%

宮城県内では、本遺跡と時期の近接する管生田遺跡（縄文時代中期末葉～前期初頭）において、石鏃の形態から見た時期的な特徴が明らかにされている（丹羽・阿部・小野寺：1983・9）。それによると、管生田遺跡では、凹基（無茎で抉りのあるもの）が出土量全体の60%を占め、

平基・丸基（無茎で抉りのないもの）は各々10%未満と少なく、凸基（有茎のもの）は出土していない。これと本遺跡の場合を比較して見ると、無茎で抉りのあるものが主体を為す点では一致し、無茎で抉りのないものが32%を占める（第2類を管生田遺跡の分類に習って平基と丸基に細別してもそれぞれ全体の16%に達する）点、および有茎のものが出土し、それが全体の13%に及ぶ点において異なる。

一方、縄文時代後期後葉（金剛寺式期）～晩期初頭の土器を主体的に出土する東足立遺跡（黒川：1981）では、無茎で抉りのあるものが23%、無茎で抉りのないものが13%、有茎のものが64%の割合で出土しており、本遺跡との違いは明らかである。

石匙：縦長のものと横長のものに分類されたが、縦長のものが全体の79%を占め主体を為す。これは、縄文時代中期中葉（大木 8b式期中心）の勝負沢遺跡（丹羽・阿部・小野寺：1982）や中期後葉（大木9式期中心）の上深沢遺跡（宮教委：1978）、あるいは管生田遺跡、（中期末葉～後期初頭）などの場合と同じであるが、横長のものが主体をなす東足立遺跡（後期後葉～晩期初頭）の場合とは相異するものである。

不定形剥片石器：剥片石器の中で、定形石器以外のものを一括した。これらは、「不定形石器として分類され、石器研究上意味を持たされていない石器」（岡村：1979）と言える。本遺跡では、それらを、素材や形態、刃部などに見られる特徴によって大きく4つにまとめた。すなわち、1：比較的大形で縦長の剥片を素材とするもの、2：鋭い先端部を持つもの、3：周囲に刃部を持つもの、4：1～3以外のものである。

しかし、これは甚だ便宜的な選分けであり、「石器の属性を形態、製作技法、機能などの面で分析して、客観的基準を持って不定形石器とされているものの中から新器種を抽出」(岡村：1979・3)することが、今後の検討課題となろう。

磨製石斧：すべて定角式の磨製石斧であるが、横断面を見ると側縁に脹らみを持つものが主体をなす。刃部は、両刃で刃面に脹らみを持つものが多い。また、大部分のものに、刃部の摩耗や欠損、基部の剥落や欠損が認められた。

石皿：無縁のものが主体をなす。有縁のものや脚を持つものは少ない。大きさはバラエティーに富んでおり、特に小形のものが多数出土している。平面形は、円形や楕円形のものがほとんどで、凹部の形態には、椀状に深く凹んだものと皿状に浅いものと見られた。

敲石・磨石・凹石：敲打痕のあるもの、磨痕のあるもの、凹痕のあるもの、摩溝や線条痕のあるものなどが認められた。その中で最も多いのが凹痕を持つものである。凹痕には、浅いものと深いものとがあり、その数や大きさは多様である。

上記以外の石製品については、出土量が少ない。類例に乏しい、時期の近接する他の遺跡から比較検討しうるだけの資料を量的に得られない等の理由で、事実記載だけに止めた。

5. 縄文時代の遺構について

竪穴住居跡

縄文時代の住居跡は5軒（第4・6・7住1号炉・7住2号炉・8号住居跡）確認された。これらの住居跡の特徴を整理し、表にまとめている。一覧表でもわかるように住居壁、周溝が存在し、住居平面形が推定できたものは2軒（第6・7号住居跡1号炉）ある。住居跡の平面形はいずれも円形を基調としている。規模は第6号住居跡で長軸4.3m、第7号住居跡1号炉で長軸5.1mあり、大きな違いは認められない。床面について、前述の2軒の住居跡で貼り床が認められた。なお、第7号住居跡1号炉では土器埋設石囲部の周辺とその前面に平坦な石が敷かれていた（床面敷石）。その他の住居跡は削平が著しく不明である。柱穴について、その規則性が認められたものは第6・7号住居跡1号炉である。第6号住居跡の柱穴は炉の中軸線を対称として2個ずつ、さらに、炉の中軸延長線上に1個配置されている。第7号住居跡1号炉の柱穴は炉の中軸線を対称として2個ずつ配置されている。住居平面形が推定できた住居跡の周溝は出入口、炉石組部の後方を除いて全周している。炉跡は各住居跡に1基構築されている。その他の施設として出入口（第6号住）・埋設土器（第7号住1号炉）が確認されている。以上のように、各住居跡で確認された施設を整理してみた。この中で住居平面形床面、柱穴、周溝などは不明なものが多い。そのため、ここでは炉跡を取り上げて検討してみたい。

炉跡

5軒の住居跡に構築された炉跡の構造は次の4つのタイプがある。

第1類：土器埋設石囲部・敷石石組部からなるもの（第4・8号住）。

第2類：土器埋設石囲部・敷石石組部・閉鎖石組部からなるもの（第6号住）。

第3類：土器埋設石囲部・敷石石組部・開口石組部からなるもの（第7号住1号炉）。

第4類：土器埋設石囲部・石組部からなるもの（第7号住2号炉）。

以上の第1～4類は2～3つの空間からなる土器埋設石組複式炉である。

第1類は石囲部に2個の土器が埋設されている。埋設土器は口縁部・胴下部を欠く深鉢形土器で、正位の状態で埋設されているもの(第8号住)、記録不備のため不明なもの(第4号住)がある。土器埋設石囲部と敷石石組部の境は大きな石で区画されている。第2類は石囲部に1個の土器が埋設されている。埋設土器は胴上部を欠く深鉢形土器で正位の状態で埋設されている。土器埋設石囲部と石組部の境は大きな石で区画されている。敷石石組部と閉鎖石組部は一列に並ぶ小さな石で区画されている。第3類は石囲部に1個の土器が埋設されている。埋設土器は口縁部を欠く深鉢形土器で正位の状態で埋設されている。土器埋設石囲部と石組部は大きな石で区画されている。第4類は石囲部に1個の土器が埋設されている。埋設土器は口縁・胴下部

を欠く探鉢形土器で正位の状態で埋設されている。土器埋設石囲部と石組部は大きな石で区画されている。

以上の 4 つのタイプを構造的な面からみれば第 1〜3 類と第 4 類は敷石のある石組部と敷石のない石組部の違いである。また、第 1〜3 類は敷石石組部の後方に閉鎖あるいは開口石組部の施設が付設されるかの違いである。しかし、第 1〜4 類は石囲部に 1 個あるいは 2 個の土器が埋設されるという違いがあるが、土器埋設石囲部を持つという点では違いはない。

次に、平面形、規模についてみてみる。規模は第 1〜4 類はいずれも長軸が 1.3〜1.5m以内、最大幅が 0.8〜1m以内で違いは認められない。平面形は第 1 類が下脹みの楕円形であるのに対し、第 2〜4 類はダルマ形である点に大きな違いが認められる。この平面形の相異は以下で述べる住居跡の年代から次のような変化が認められる。第 1 類は大木 10 式第 1 段階、第 2〜4 類は大木 10 式第Ⅱ段階の土器が出土している。この結果、第 1 類の下脹みの楕円形の炉から第 2〜4 類のダルマ形の炉に形態変化したことが理解される。

住居跡の年代

発掘調査によって検出された竪穴住居跡は 5 軒ある。これらの住居跡はすでに述べた通り、縄文時代中期大木 10 式土器が出土している。このことから住居跡の年代は次のように推定される。

大木 10 式第Ⅰ段階のもの：第 4・8 号住居跡

大木 10 式第Ⅱ段階のもの：第 6・7 号住 1 号炉・7 号住 2 号炉

	4　住	6　住	7住1号炉	7住2号炉	8　住
細分・床面	A　群	B　群	B　群	B　群	A　群
堆積土	—	B　群	B　群	—	—

縄文時代住居跡一覧表

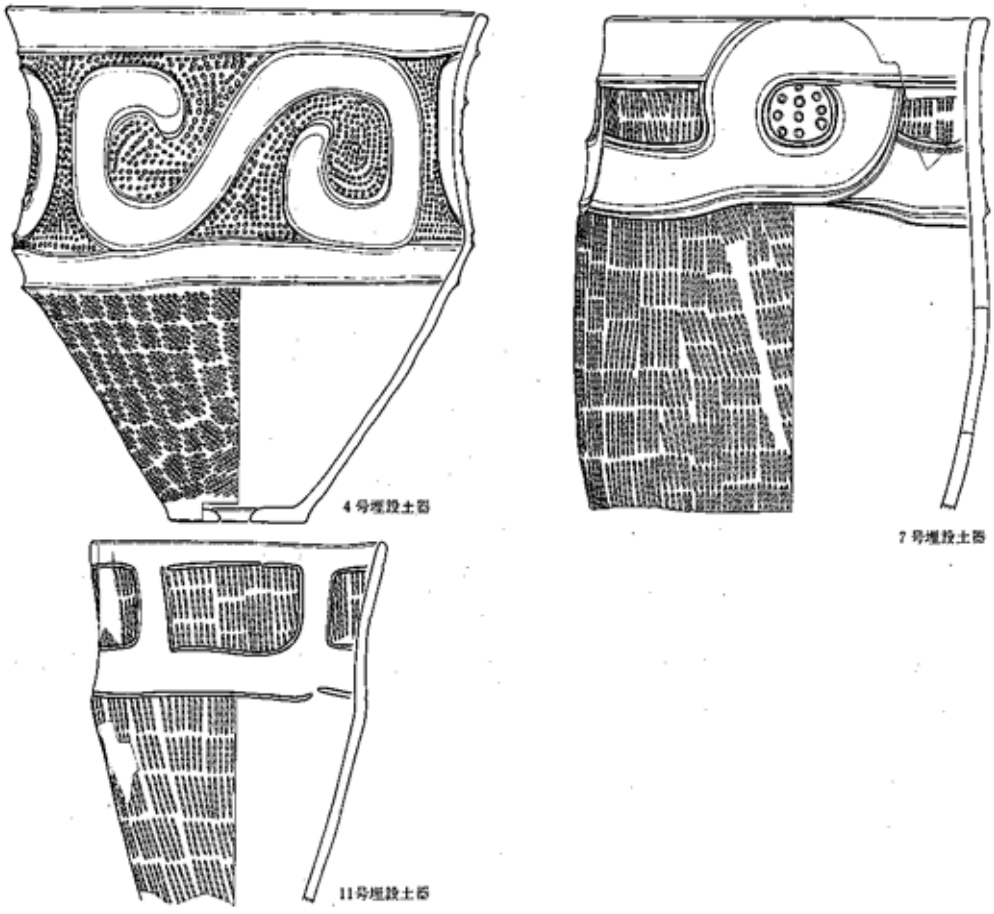
住居跡名	平面形・規模	炉（構造・規模・長軸方向）	柱穴	備考	時期
第4号住居跡	不明	土器埋設石組複式炉：土器埋設石囲部(埋設土器2個)・敷石石組部 規模：1.4×1.0m、下脹みの楕円形 長軸方向：南西ー北東方向	不明	周溝の一部が検出された	大木10式第Ⅰ段階
第6号住居跡	円形 規模：4.3×4.1m	土器埋設石組複式炉：土器埋設石囲部・敷石石組部・閉鎖石組部 規模：1.4×0.8m、ダルマ形 長軸方向：南ー北方向	炉中軸線を対称に2個1組 炉中軸延長線上に1個	周溝は出入口と石組部後方を除き全周するものと推定 出入口有	大木10式第Ⅱ段階
第7号住居跡1号炉	円形 規模：5.1m？	土器埋設石組複式炉：土器埋設石囲部・敷石石組部・開口石組部 規模：1.5×1.0m、ダルマ形 長軸方向：南東ー北北西方向	炉中軸線を対称に2個1組	周溝は石組部後方を除き全周するものと推定 土器埋設石囲部周辺とその前面に床面敷石 石組部脇に正位埋設土器	大木10式第Ⅱ段階
第7号住居跡2号炉	不明	土器埋設石組複式炉：土器埋設石囲部・石組部 規模：1.25+α×0.9m 長軸方向：南東ー北西方向	不明		大木10式第Ⅱ段階
第8号住居跡	不明	土器埋設石組複式炉：土器埋設石囲部(埋設土器2個)・敷石石組部 規模：1.5×1.0m、下脹みの楕円形 長軸方向：東ー西方向	不明		大木10式第Ⅰ段階

その他の遺構

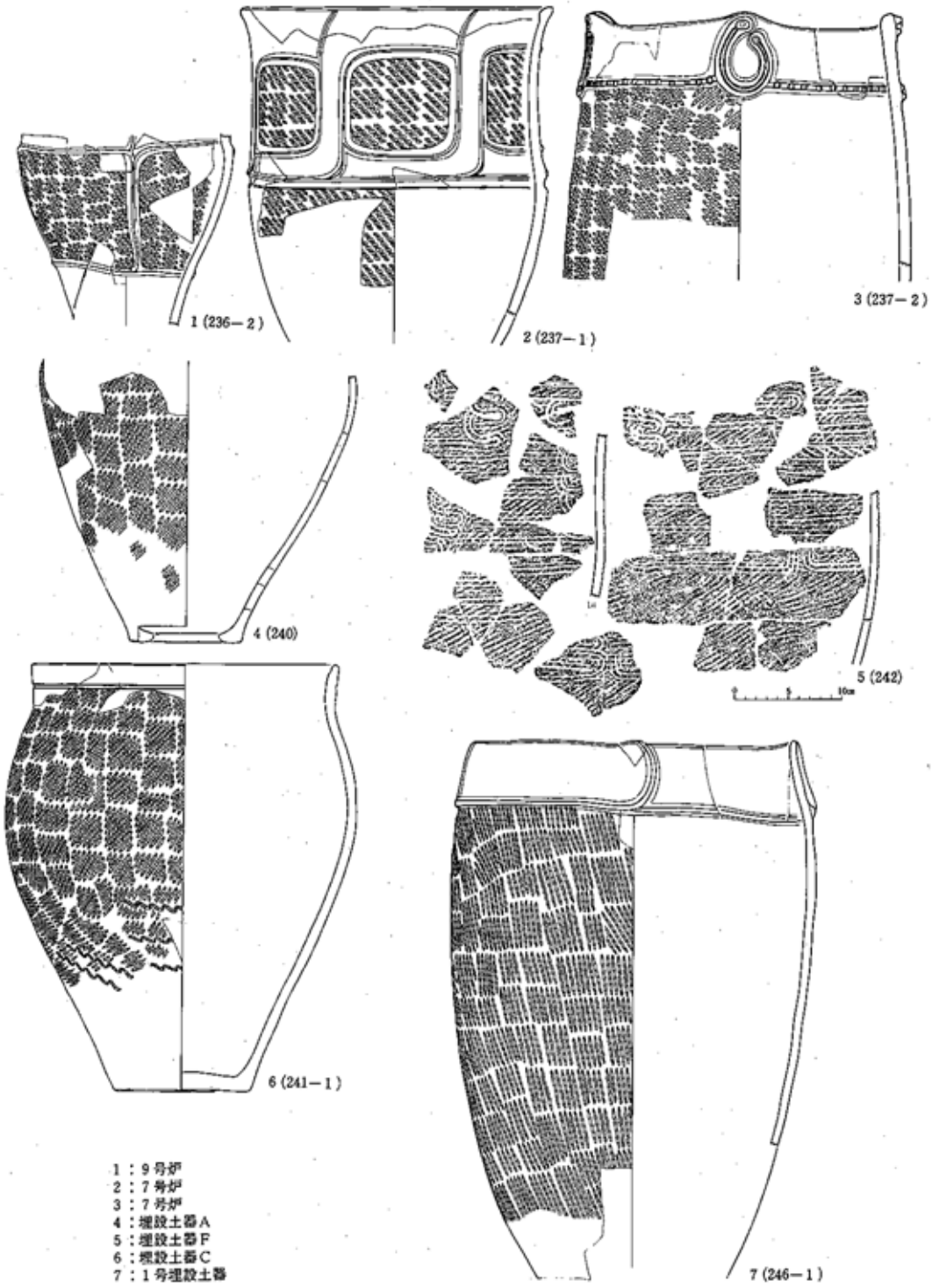
竪穴住居跡以外の縄文時代の遺構としては炉跡、配石遺構、立石遺構、小配石遺構、石組遺構、埋設土器遺構、土壙がある。

炉跡

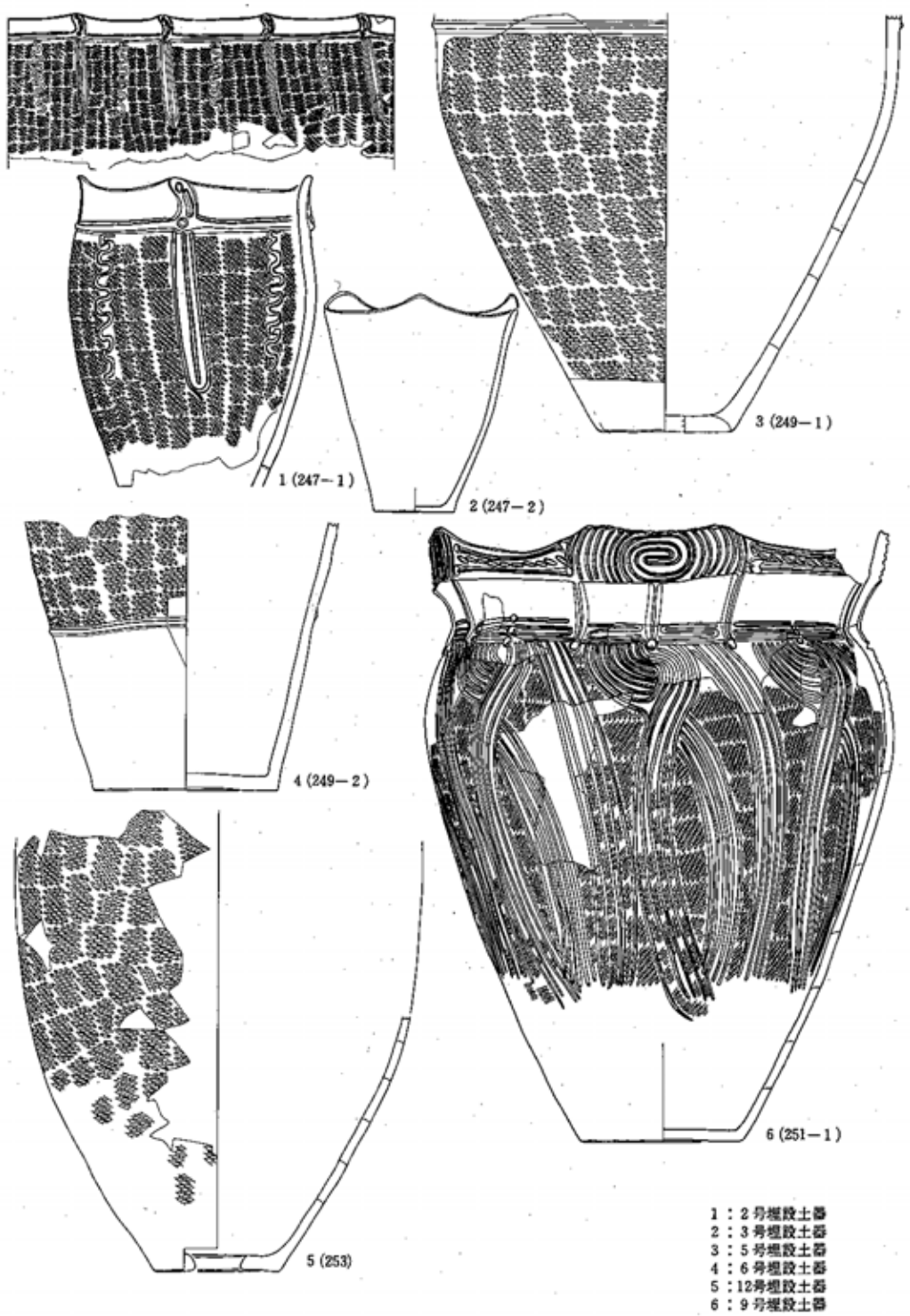
第6・7号住居跡付近からその東にかけての平坦部南半で10基の炉跡が確認されている。このうち住居跡付近の第1号～第7号炉については発掘調査時に、本来竪穴住居跡に伴っていたのであろうとの認識がなされており、またその東の第8号～第10号炉は保存状態が良くない。したがって炉の確認面は、それが伴っていたはずの住居跡の確認面より下になる可能性が大きいから、不明確になる。また遺構に伴って土器が出土しているものでも第7・9号炉跡以外は整理の際に確認できなかったため、所属時期を明らかにする根拠に乏しい。第9号炉は埋設土器に方形区画文が施されて後期第Ⅰ群土器に含まれることから後期初頭（南境式、向畑遺跡段階）に比定される。他は少なくとも第3号～第6号炉跡が第7号住居跡より上層に構築され、



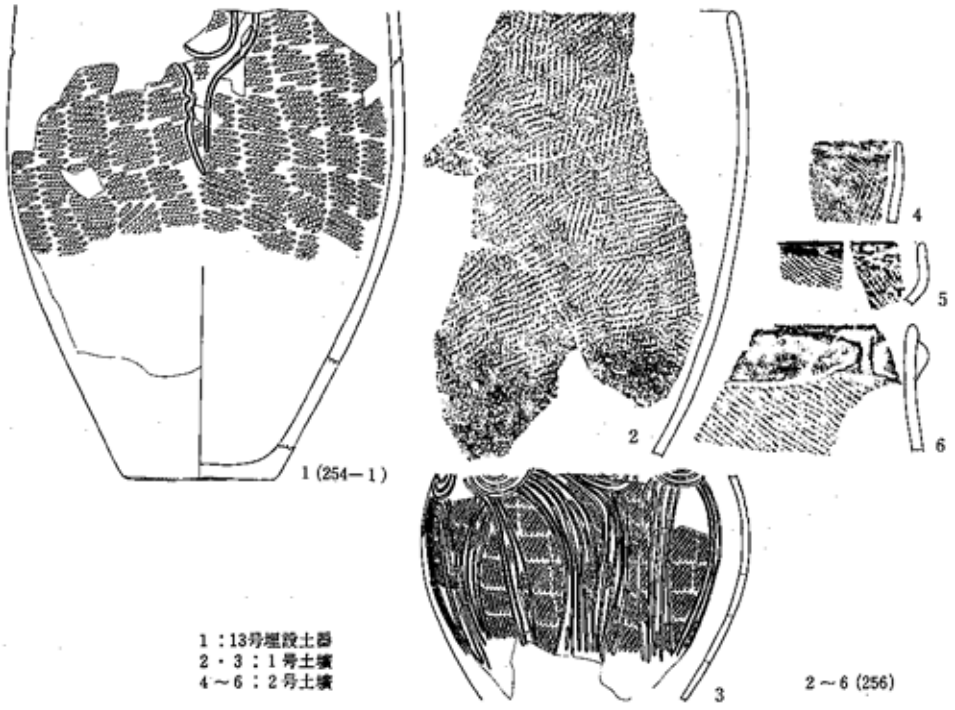
第488図　遺構出土土器



第489図　遺構出土土器



第490図　遺構出土土器



第491図　遺構出土土器

その周囲からは後期前葉より新しい遺物がほとんど出土していないということから、後期前葉の時期と推定されるに過ぎない。また第1・2・7～10号炉も形態が類似することから同時期と思われる。

第7号炉を除いたこれらの炉は、いずれも周囲に石を配した石囲炉であり、平面形は円形・方形、「コ」字形で、第1・9号炉では内部に土器を埋設しており、第10号炉もその可能性がある。

第7号炉はこれらと異なって、周囲に土器と石を配している。この土器は2個体あり、そのうち1個体は土器の特徴からすれば中期大木10式に、一方は後期第Ⅰ群土器に含まれるから後期初頭にそれぞれ比定され、所属時期の異なった土器が使用されていることになる。それは、後期初頭の時期にそれ以前の中期に作られた土器をも用いて構築したか、あるいは両方の土器が同時に存在する時期があるかの2つの理由が考えられる。後者の場合には中期の土器が大木10式でも第Ⅱ段階かそれ以降に位置づけられているから、最終末期にまで存在し、後期の土器が、後期初頭でも最も古い時点から存在すれば、中期から後期への移行期に遺構内におけるあり方としては共伴する可能性がある。前者の場合には後期に何らかの原因で発見した古い土器の利用が行われたことを示す。この2つの理由のいずれであるかは、大木10式の最終末(第Ⅳ

段階）の土器群の内容が必ずしも明らかにされていない現時点では決定しにくいので、両者を併記しておくことにする。

配石遺構（第１号配石遺構）と立石遺構

配石遺構は平坦部のほぼ中央に位置しており、立石遺構は近接した南側にある。両遺構とも直接的に年代を決定する資料はないが、ごく近くにあって同一面で構築されているとみられるところから大きく時期の離れたものとは考えにくい。配石遺構下には６基の埋設土器遺構が構築されており、配置に規則性は認められないが、配石遺構の輪郭内におさまっており、その周囲に同様な遺構はみられないから配石遺構に伴った埋設土器遺構であると思われる。この埋設土器遺構の土器は、所属時期を限定しにくいものが多いが、埋設土器(Ｆ)の土器は文様の特徴から後期第III群土器に含まれる。したがって遺構は後期前葉（南境式、第III群土器段階）の年代が与えられる。また配石遺構は不定形の川原石が配されて上面は凹凸が激しく住居跡等とは考えられないこと、埋設土器遺構には底部に穿孔が施されている土器（埋設土器Ａ・Ｂ）があり、埋葬施設の可能性が強いことから、墓の性格を与えたい。

立石遺構は秋田県大湯遺跡(斎藤忠他：1953)、岩手県立石遺跡(大迫町教委：1979)などから発見されており、墓あるいは祭祀遺構と考えられている。本遺跡の立石遺構には石組のため掘り方はみられるものの、その下に土壙は検出されておらず、墓とする根拠はない。

小配石遺構

平坦部の南東端で検出された。小配石の下部に土壙に伴うと思われ、土壙内堆積土が人為的に埋められていることから埋葬施設の可能性がある。遺物は出土しておらず、時期を限定できないが、後期前葉の土器を含んだ基本層位第III層上面で確認されていること、その上の基本層位第Ⅱ層からは後期中葉までの土器が出土していることから、後期前葉と考えられる。

石組遺構

第４号住居跡を切って構築されている。「コ」字形に川原石を配し、内部に小礫と粘土を敷いた遺構である。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。

埋設土器遺構

配石遺構下で検出されたものを除き、13 基の埋設土器遺構がみられ、平坦部南半に分布する。いずれも土器とほぼ同じかあるいはいくぶん大きめの掘り方に土器を正位に据えている。使用されている土器には第４号・第 12 号のものに焼成後の底部穿孔が施され、第１・３・７・11 号のものは底部を欠いている。したがってこれらは埋葬施設の可能性が強く、他も同様と思われる。また第９号は上部に配石を伴うかも知れない。

所属時期は、それぞれの土器が器形と文様の特徴からみて下記のように位置付けられるところから遺構の年代もその時期に比定される。

第1号―大木10式～後期第Ⅰ群土器＝中期末～後期初頭
第2号―後期深鉢0Ⅲb3類＝後期前葉（南境式、第Ⅱ群土器段階）
第3号―後期深鉢0Ⅴb類＝後期前葉（南境式、第Ⅰ・Ⅱ群土器段階）
第4号―中期深鉢ＤⅠb類＝大木10式第Ⅱ段階
第5号―不明
第6号―不明
第7号―中期深鉢H類＝大木10式第Ⅱ段階
第8号―不明
第9号―後期深鉢HⅡc類＝後期前葉（南境式、第Ⅱ群土器段階）
第10号―不明
第11号―中期深鉢ＥⅠ類＝大木10式第Ⅱ段階以降
第12号―不明
第13号―後期深鉢0Ⅲb2(ⅰ)類＝後期前葉（南境式、第Ⅱ群土器段階）

時期不明とした第5・6・8・10・12号のうち第5・6・12号は土器の地文などの特徴からみて、中期末葉から後期前葉のいずれかに属する可能性がある。第8・10号は基本層位第Ⅲ層上面（あるいは途中）で検出されており、小配石遺構と同様の理由から後期前葉と思われる。

土壙

特徴の明らかな3基を取り上げた。いずれも性格は不明であるが、第3号はフラスコ状と思われる。第1･2号からは第Ⅱ群土器が出土しており、該期に比定される。第3号は不明である。

6. 平安時代の遺構と遺物について

平坦部の北東側から竪穴住居跡が4軒（第1・2・3・5号住居跡）検出され、内部から少量の遺物が出土している。

竪穴住居跡はほぼ方形の平面形で、カマドを備えている。第1号住居跡では貼り床が行われ、カマド石側に貯蔵穴状のピットがみられる。周溝は第5号住居跡の西壁沿いにのみ認められる。いずれも柱穴は不明である。このような構造は県内各地で発見されている平安時代の住居跡と基本的に変わるところがない。特徴的な点はすべての住居跡が川石を利用してカマドを構築していることであり、特に第5号住居跡はカマド本体から煙道にかけての全体が整然とした石組でつくられており、他に例が少ない。またカマドの軸方向によって住居の方向を定めると、ほぼ北を向くもの（第1・5号住居跡）と、東を向くもの（第2・3号住居跡）とに分かれる。

そして第3号住居跡と第5号住居跡は近接して位置しており、互いに軒が重なる状況と推定されることから、同時に存在したとは考えにくく、カマドの方向によって若干時期の異なる可能性がある。

竪穴住居跡からは土師器・須恵器が出土している。鉄製品など他の遺物は整理時までに失われていたため省略する。

土師器には坏と甕がある。いずれも製作にロクロ技術が用いられている。坏は大小の別がみられるものの、胴部から口縁部まで内弯気味に立ち上がって、底部が大きく、低いものと、口縁部が外反気味になってやや高いものとがある。いずれも底部あるいは底部と胴下部に手持ヘラケズリが施されている。甕は長胴形と思われる。須恵器は壺が1点だけ出土している。これらの土器は床面から出土して住居に伴うものや堆積中のものとがあるが、土師器坏に関しては特に時期が異なる特徴をもつものはない。その特徴を県内の類例と比較すると青木遺跡第 21 号住居跡(小川淳一：1980)、台ノ山遺跡第8号住居跡出土土器とほぼ一致しており、これらの土器群は宮前遺跡の報告文（丹羽茂：1983）において表杉ノ入式初期（9 世紀前半）の年代が与えられているところから本遺跡の土師器坏も同時期と思われる。また他の土器についても同様であろう。

したがって第2号住居跡と第5号住居跡は遺物の点からすると同時期と考えられ、カマドの方向による住居跡の時期差があったとしても土器によって設定される時期幅内のこととなる。

7. 遺跡の構成

二屋敷遺跡では発掘調査の結果、縄文時代、平安時代および中世以降の遺構と遺物が発見されており、弥生時代と古墳時代のものはみられない。

縄文時代

縄文時代で最も古いものとしては、早期の土器があるが、ごく少量で遺構は発見されていない。遺跡に生活の痕跡が明瞭に残されるのは中期後葉になってからである。

中期後葉、大木 9 式期には若干の土器がみられ、さらに大木 10 式期になると住居跡が出現する。同期の住居跡は5軒であるが、より細かな段階区分にあわせると大木10式第Ⅰ段階のものが2軒（第4・8号住居跡）、同第Ⅱ段階のもの3軒((第6・7・7（2号炉）号住居跡))となり、調査区外への住居跡群の拡大は考えられるものの、調査区でのあり方からすれば、同時期に存在するのは数軒単位である。また第Ⅰ段階の第4・8号住居跡は平坦部北側に位置するのに対し、第Ⅱ段階の第6・7号住居跡はその南側にあり、約120m離れている。なお大木10式期のほかの遺構として他の施設を伴わない埋設土器遺構が3基（第4・7・11号）あり、うち2基が

第Ⅱ段階、1基が第Ⅱ段階以降とされるが、第Ⅱ段階の第6・7号住居跡から約20mずつ離れて点在している。ほかに第Ⅲ段階に比定されるものを含めて大木10式の土器は第6・7号住居跡付近の堆積層からも出土しており、後期の遺物包含層に混入しているものも多い。

後期前葉になると平坦部南東端に広く、北端に小規模な遺物包含層が形成され、大量の遺物が出土している。土器の検討によって遺物包含層の主体を成す第Ⅱ群土器とそれに混入した第Ⅰ群土器、さらにこれらより後出の特徴をもつ第Ⅲ群土器に分けられ、その順の段階的変遷が認められるところから本遺跡の後期前葉は3期に区分される。第Ⅰ群土器期に属する遺構としては第9号炉があり、第7号炉、第1号埋設土器遺構もその可能性がある。第Ⅱ群土器期には埋設土器遺構3基（第2・9・13号）、土壙2基（第1・2号）があり、遺物包含層の形成も同期に位置づけられる。また炉跡の多くもその可能性がある。第Ⅲ段階には配石遺構があり、立石遺構もその可能性がある。

このように区分した時期ごとには属する遺構が少ないが、後期前葉という幅の中には炉跡、小配石遺構、埋設土器遺構の大半が含まれるものと思われ、ほとんどが平坦部南側と北端に位置しているが、配石遺構と立石遺構だけは平坦部の中央にある。配石・立石遺構は墓・祭祀に関連する宗教的な施設であり、類似して埋葬施設と考えられる埋設土器遺構で時期の明確なものが、第Ⅰ・Ⅱ群土器期のものだけであることからすると、第Ⅰ・Ⅱ群土器期には日常生活に強く関連する炉跡に近接した場所に構築されていた埋葬施設（埋設土器遺構）が、第Ⅲ群土器期になると平坦部中央に集まってその上に配石が施され、さらに立石遺構がつくられ、以前の単なる埋葬施設に祭祀的性格が加わっていった過程を示していると考えることができる。なお、第Ⅲ群土器期には他に遺構が確認されておらず、日常生活の場との関係は不明である。

第Ⅱ群土器期の南側遺物包含層は、各層がおおむね東ないし南東方向に傾斜している。概報では「一部は一段上の平坦地の集落から投げ捨てられて形成された可能性がある。」と述べられている(林・藤沼他：1971、33ページ)。これが具体的にどの層を指すのか今回の整理では確かめられなかったが、各層の傾斜からすると、西あるいは北東方向から形成されたと考えられるから、概報での指摘もありうることで、調査区で発見された炉跡を住居跡に伴うとした場合でも住居群と包含層の形成された方向との関係には不自然な点が残る。したがって該期の住居跡群は同一段丘面の調査区より西、北西にさらにのびる可能性がある。

後期中葉の時期には土器が少量出土しているだけで、遺構は認められない。これ以後、晩期の土器片が1点出土しているほかは、平安時代まで遺構・遺物ともに発見されなかった。

平安時代とそれ以降

平安時代には竪穴住居跡が4軒検出されている。出土土器の検討から平安時代でもその初期（9世紀前半）に比定され、調査区のあり方からすれば、数軒単位の小規模な集落が営まれて

いたものと考えられる。

中世以降のものには塚・墓壙などがある。

Ⅶ. ま と め

1. 二屋敷遺跡は白石川の支流である松川右岸の河岸段丘上に立地している。
2. 縄文時代早期末、中期後葉、後期前葉・中葉、晩期後葉、平安時代、中世以降の遺物が出土しており、その大部分は縄文時代中期末・後期前葉のものである。
3. 縄文時代中期末の土器は大木 10 式第Ⅰ・Ⅱ段階のものが主である。
4. 縄文時代後期前葉南境式土器は、3 段階に変遷することが明らかになり、後期初頭（南境式初期）にみられた宮城県北部と南部の地域性は 2 段階目まで継承されている。
5. 縄文時代後期前葉の土製品として異形土器、香炉、蓋、袖珍土器、土偶、滑車状耳飾、土錘、円盤状土製品、石製品として石鏃、石錐、石匙、石篦、不定形石器、打製石斧、環状石斧、磨製石斧、石皿、敲石、磨石、凹石、石剣、異形石器、玉、石棒、石錘、円盤状石製品などが出土した。
6. 縄文時代の遺構としては中期末大木 10 式期の竪穴住居跡と埋設土器遺構、後期前葉南境式期の炉跡、配石遺構、立石遺構、小配石遺構、埋設土器遺構、土壙などが発見された。
7. 大木 10 式期の竪穴住居跡は、いずれも上原型複式炉をもつ。数軒単位の小規模な集落を形成していたと思われる。
8. 南境式期の遺構は、炉が住居跡に伴うものであった可能性があり、埋設土器遺構が埋葬施設と考えられるところから、住居と近接していた埋葬施設が、しだいに独自の空間を占めるようになり、配石を伴い、立石遺構が加わるものへと変化していったと思われる。炉跡の数などからすると、集落の規模は大木 10 式期よりかなり大きくなる。
9. 平安時代には竪穴住居跡が発見されており、小規模な集落があったと思われる。またこれ以降には塚、墓壙などがみられる。

引用・参考文献

阿部・黒川（1980）：「赤鬼上遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第63集
一條孝夫（1978）：「湯坪遺跡発掘調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第54集
伊東信雄（1957）：「古代史－縄文式文化の変遷」『宮城県史』第1巻
伊東信雄他（1981）：「縄文時代－縄文土器」「解説－はじめに」『宮城県史』第34巻
及川　洵他（1972）：『堂ノ前貝塚』
及川　洵他（1974）：『門前貝塚』
太田昭夫（1980）：「御所内遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第63集
太田昭夫（1980）：「大橋遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第71集
岡田・　林（1970）：「二屋敷遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第23集
岡村道雄（1979）：「縄文時代石器の基礎的研究法とその具体例」『東北歴史資料館研究紀要』
小川淳一（1980）：「塩沢北遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第69集
小川淳一（1980）：「青木遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第71集
小野寺祥一郎（1980）：「金取遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第70集
片倉・佐藤（1958）：「白石荒井縄文住居遺跡」『仙台郷土研究』第18巻第4号
加藤晋平・小林達雄・藤本強編（1983）：『縄文文化の研究』7・9
加藤晋平・鶴丸俊明（1980）：『図録石器の基礎知識Ⅲ縄文』柏書房
加藤・後藤（1975）：「宮城県登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告」『南方町史資料編』
加藤道男（1972）：「植田前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第25集
加藤道男（1981）：「植田前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第81集
加藤道男（1982）：「青木畑遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第85集
金子・和田（1968）：「綱取Ｃ地点貝塚の発掘」『小名浜』いわき市教委磐城出張所
菊地逸夫（1982）：「青木遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第88集
草間・金子（1971）：『貝鳥貝塚』
黒川利司（1980）：「持長寺遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第71集
黒川利司（1981）：「東足立遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第81集
小井川和夫（1972）：「御所内遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第25集
後藤勝彦（1957）：「陸前宮戸島里濱台囲貝塚出土の土器編年について」『塩釜市教委教育論文』第二集
後藤勝彦（1962）：「陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土土器について－陸前地方後期縄文式文化の編年的研究－」考古学雑誌48－1
後藤勝彦他（1967）：「西ノ浜貝塚緊急発掘調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第13集
後藤勝彦（1974）：「縄文後期宮戸Ⅰｂ式周辺の吟味」『東北の考古・歴史論集』
後藤勝彦（1981）：「縄文後期の土器－東北－」『縄文土器大成』第3巻
佐々木安彦（1972）：「東足立遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第25集
佐藤庄一（1972）：「家老内遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第25集
七戸貞子（1972）：「菅生田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第25集
志間・芳賀（1974）：「向畑遺跡」『柴田町の文化財』第5集
白鳥良一（1971）：「赤鬼上遺跡」「持長寺遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第24集
白 石 市（1972）：『白石市史』別巻
芹沢長介編（1979）：『聖山』東北大学文学部考古学研究会考古学資料集別冊2
田中則和他（1981）：「六反田遺跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第34集
田中則和他（1983）：「茂庭」『仙台市文化財調査報告書』第45集
土岐山武（1982）：「松田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第88集
中村良幸（1979）：「立石遺跡」『大迫町埋蔵文化財報告』第3集
丹羽　茂（1971）：「東北地方南部における中期縄文時代中・後葉土器群研究の現段階」『福島考古』第12号

丹羽　茂（1972）：「松田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第25集
丹羽・三浦・加藤（1973）：「菅生田遺跡調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第29集
丹羽　茂（1974）：「福島県における縄文時代中期の住居集落跡研究の現状と問題点」『福島考古』第15号
丹羽　茂（1981）：「大木式土器」『縄文文化の研究』第4巻
丹羽・阿部・小野寺（1982）：「勝負沢遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第83集
丹羽・阿部・小野寺（1982）：「菅生田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第92集
芳賀寿幸（1974）：「向畑遺跡調査概報」『柴田町郷土研究会報』第7号
芳賀寿幸（1983）：「向畑遺跡－考古資料－」『柴田町史』資料篇Ⅰ
芳賀良光（1968）：「宮城県宮戸島貝塚梨木囲遺跡の研究」『仙台湾周辺の考古学的研究』
林　謙作（1967）：「縄文文化の発展と地域性－東北」『日本考古学』Ⅱ
林・藤沼他（1971）：「二屋敷遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第24集
藤沼邦彦（1971）：「大山遺跡」「大橋遺跡」「塩沢北遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第24集
藤沼邦彦（1972）：「青木脇・青木後遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第25集
文化財保護委員会（1953）：『大湯町環状列石』
本堂寿一他（1979）：「八天遺跡」『北上市文化財調査報告』25集
馬目順一（1968）：「綱取貝塚第四地点発見の塀之内Ⅰ式期土器の考察」『小名浜』いわき市教委磐城出張所
馬目順一（1970）：「いわき市下片寄貝塚発見の後期縄文式土器について」『考古』第16号
馬目順一他（1975）：『大畑貝塚調査報告』
馬目順一（1977）：「いわゆる『綱取貝塚Ｃ地区』の土器について」『考古』第19号
馬目順一（1982）：「南東北」『シンポジウム堀之内土器資料集』市川考古博物館
真山　悟（1981）：「家老内遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第81集
真山　悟（1982）：「農学寮跡遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第86集
三ッ塚・阿部・佐藤（1976）：「沼津貝塚の考古学的調査」『沼津貝塚保存管理策定事業報告書』
宮城県教育委員会（1976）：「宮城県遺跡地図・地名表」『宮城県文化財調査報告書』第46・47集
宮城県教育委員会（1978）：「上深沢遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第52集
宮城県教育委員会（1981）：「宮城県遺跡地図・地名表」『宮城県文化財調査報告書』第73・74集
目黒吉明他（1969）：『上原遺跡概報』
目黒・木本他（1972）：「塩沢上原Ａ遺跡」『福島県文化財調査報告書』第36集
目黒吉明他（1975）：「塩沢上原Ａ遺跡」『福島県文化財調査報告書』第47集
茂木好光（1984）：「大谷地遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第100集
森　貢喜（1981）：「家老内遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第79集
吉田義昭（1957）：『門前貝塚』

写　真　図　版

図版 1　二屋敷遺跡周辺の航空写真

遺跡遠景

図版2

遺跡近景

調査状況

調査状況

図版3

南側遺物包含層（ＧＨ56・57区第３層）の遺物出土状況、

南側遺物包含層（ＧＪ・ＧＫ57区第３層）の遺物出土状況

南側遺物包含層（ＧＪ・ＧＫ57区第３層）の遺物出土状況

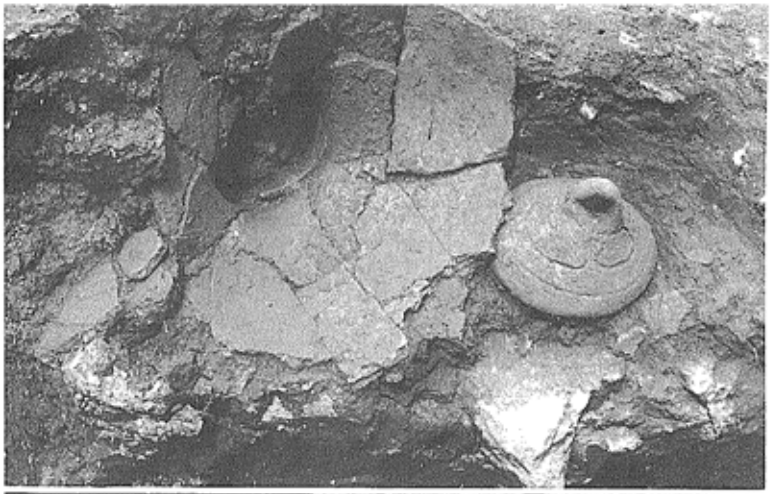
図版４

南側遺物包含層（G H56・57区第３層）の遺物出土状況

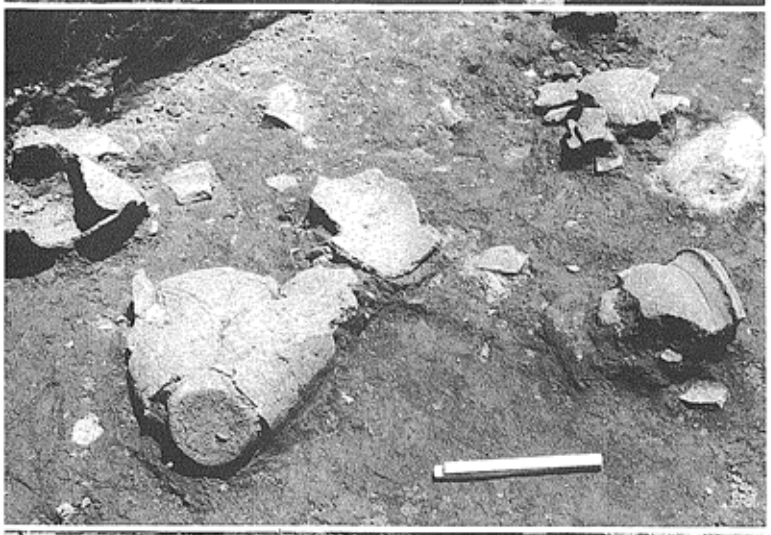
南側遺物包含層（G H56区第４層）の遺物出土状況

南側遺物包含層（G I 57区第３・４層）の遺物出土状況

図版５



南側遺物包含層（ＧＪ57区第３層）の遺物出土状況

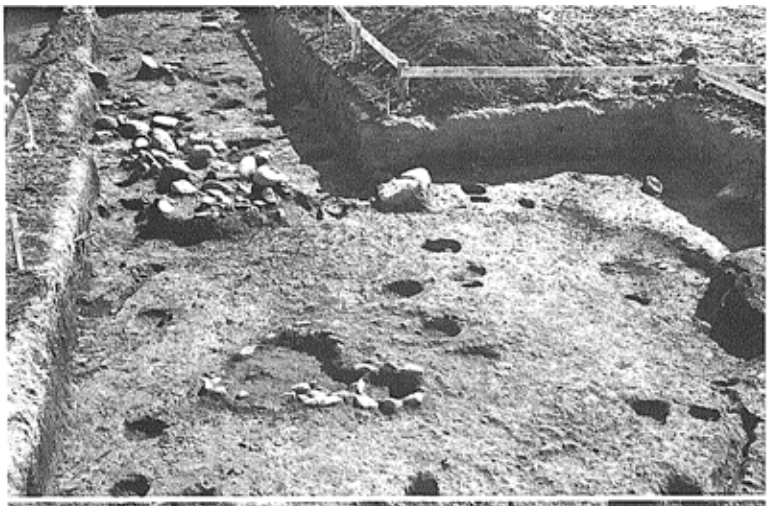


南側遺物包含層（ＧＪ・ＧＫ56・57区第３層）の遺物出土状況

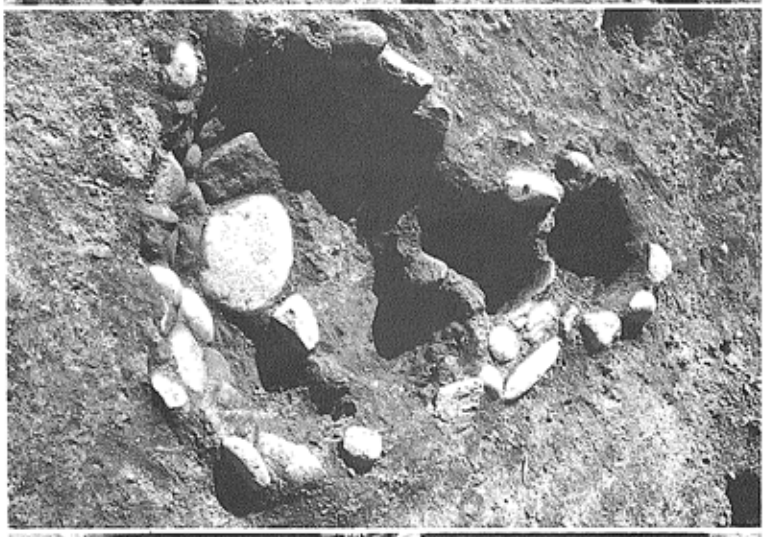
北側遺物包含層（ＩＨ56区第２層）の遺物出土状況

図版６

第４号住居跡



第４号住居跡炉



第６号住居跡

図版７

第６号住居跡炉

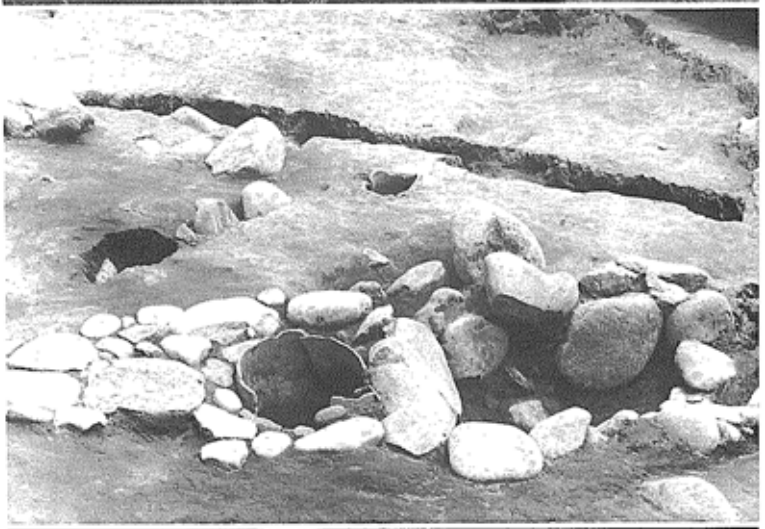
第６号住居跡炉

第７号住居跡

図版８

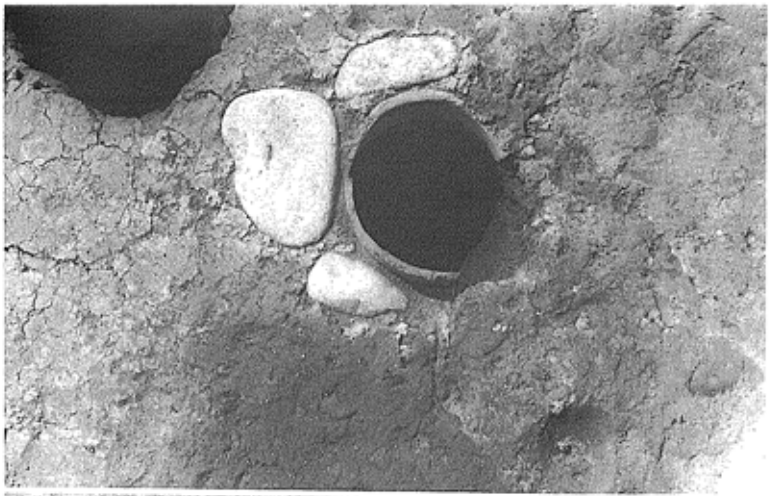
第７号住居跡炉

第７号住居跡炉



第７号住居跡炉立ち割り状況

図版９



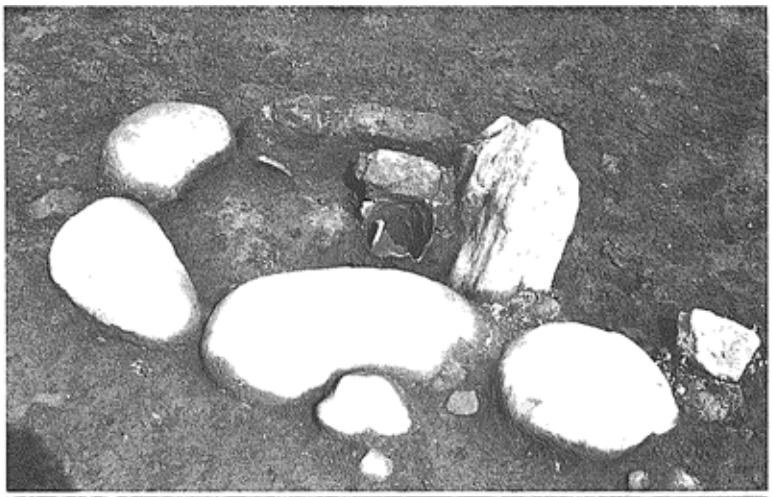
第７号住居跡２号埋甕

第７号住居跡２号炉

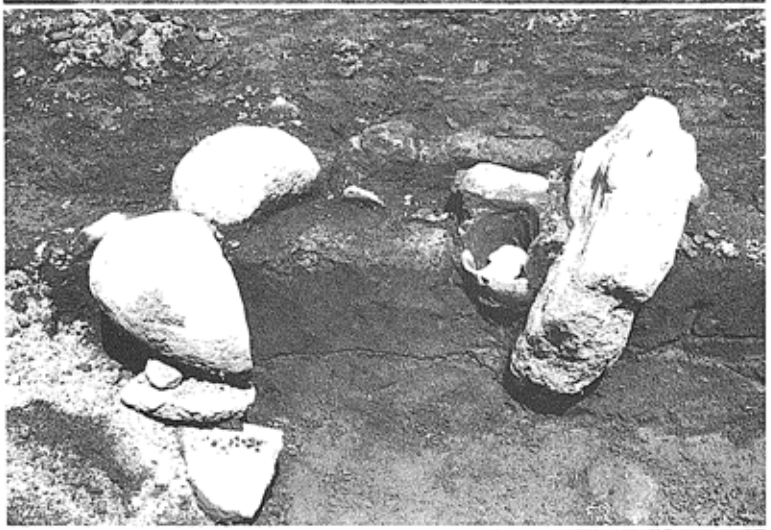
第８号住居跡炉

図版10

第１号炉跡



第１号炉跡立ち割り状況



第２号炉跡

図版11

第３～６号炉跡

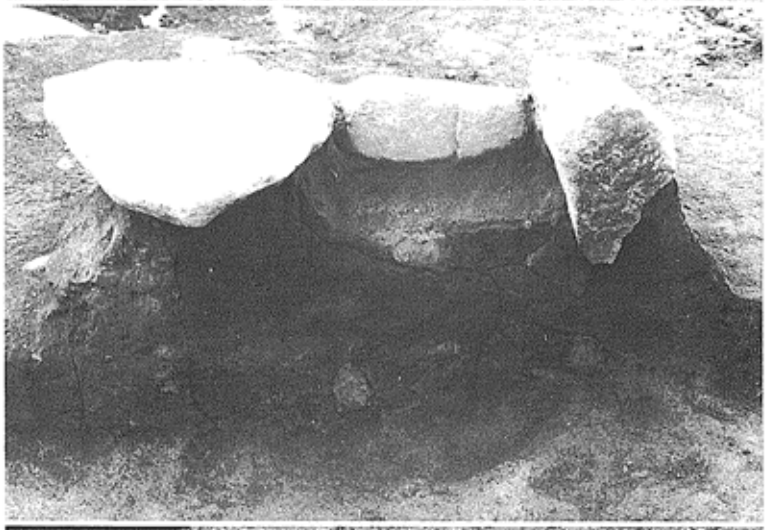
第３号炉跡

第３号炉跡立ち割り状況

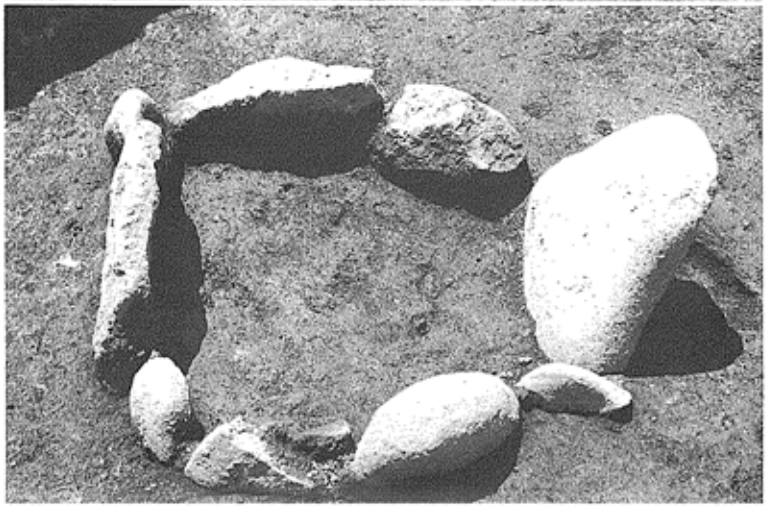
図版12

第４号炉跡

第５号炉跡立ち割り状況

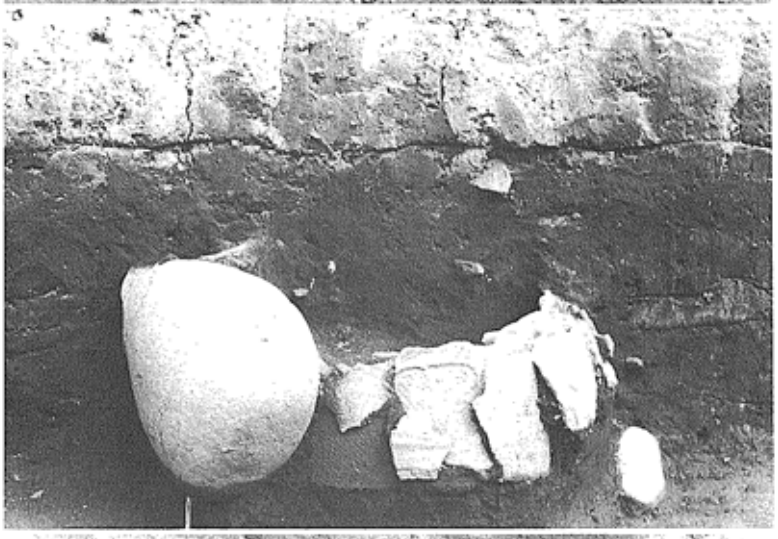


第６号炉跡

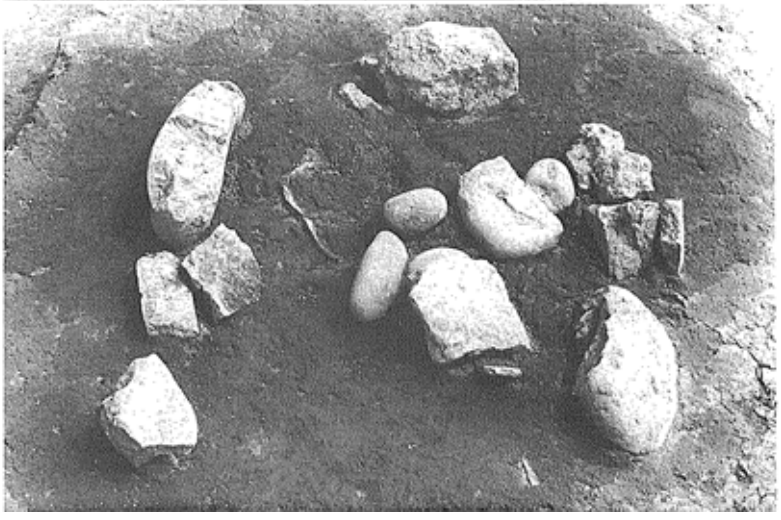


図版13

第６号跡立ち割り状況



第７号炉跡



第９号炉跡

図版14

第10号炉跡

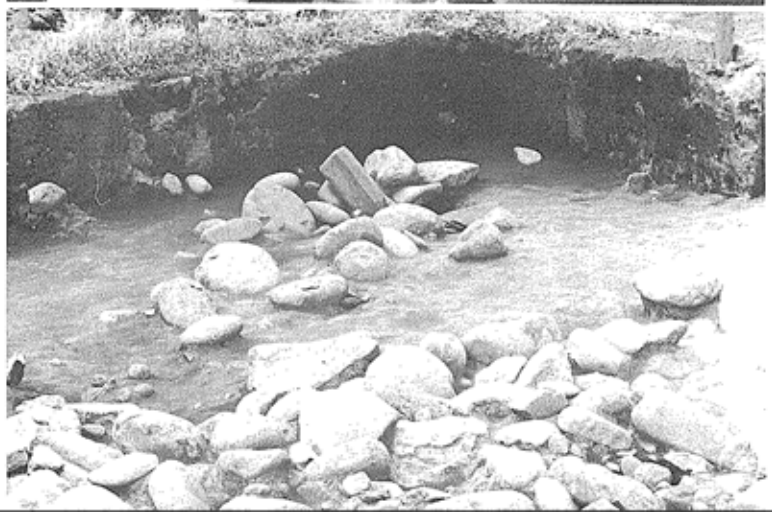
第１号配石遺構

第１号配石遺構細部

図版15

第１号配石遺構細部

第１号配石遺構下の埋設
土器

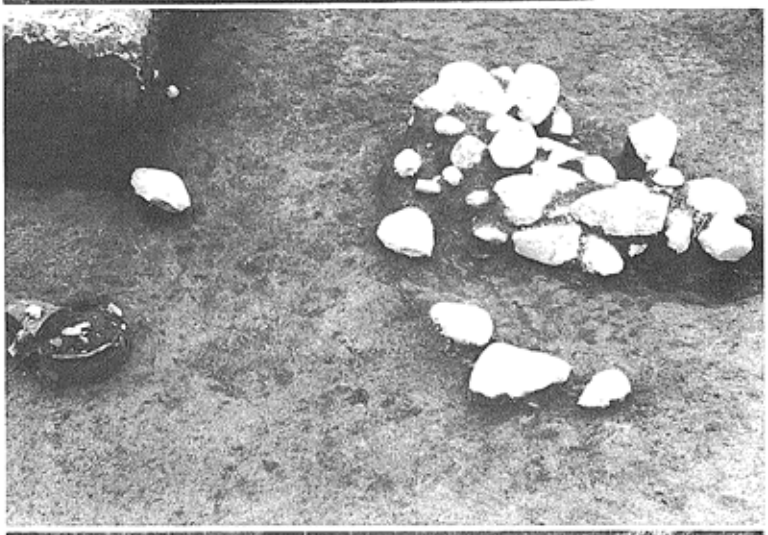


立石遺構

図版16

立石遺構の立ち割り状況

小配石遺構



石組遺構

図版17

第１号埋設土器遺構

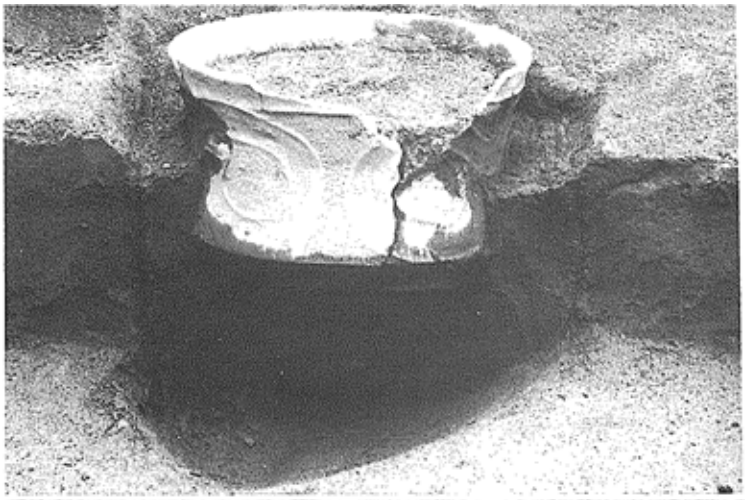
第２号埋設土器遺構

第３号埋設土器遺構

658

図版18

第４号埋設土器遺構



第６号埋設土器遺構

第７号埋設土器遺構

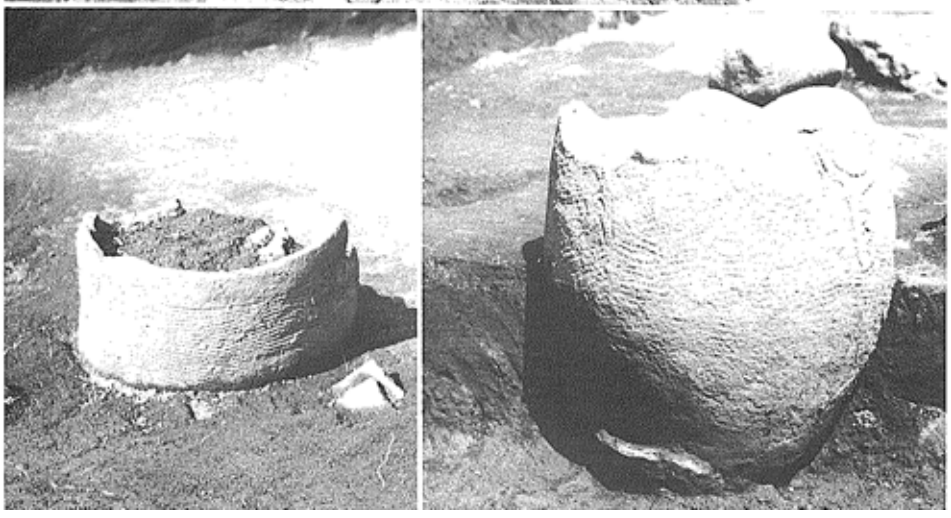
図版19

第９号埋設土器遺構

第11号埋設土器遺構

第10号埋設土器遺構(左)

第13号埋設土器遺構(右)

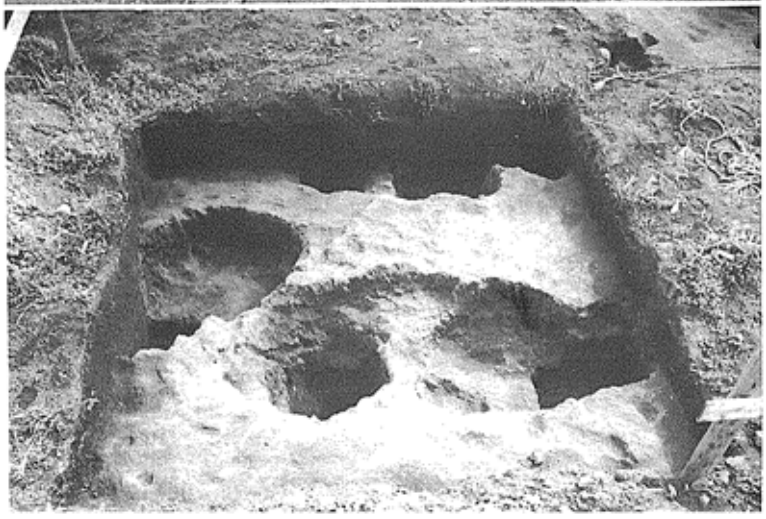


図版20

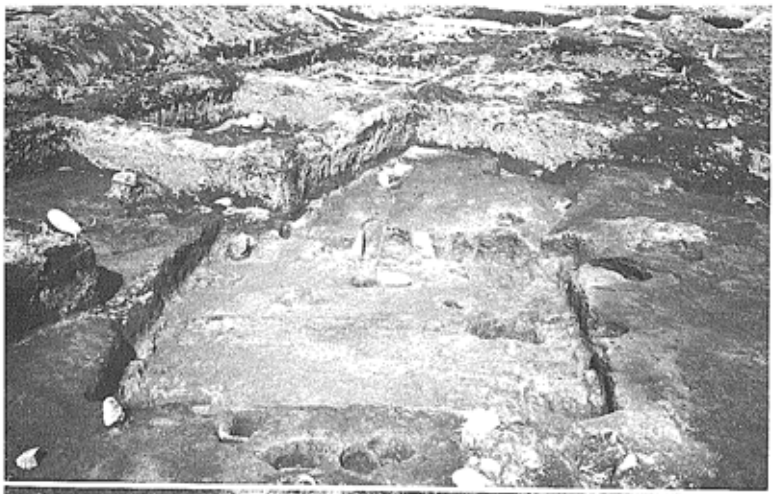
北側遺物包含層下の溝跡

その他の遺構

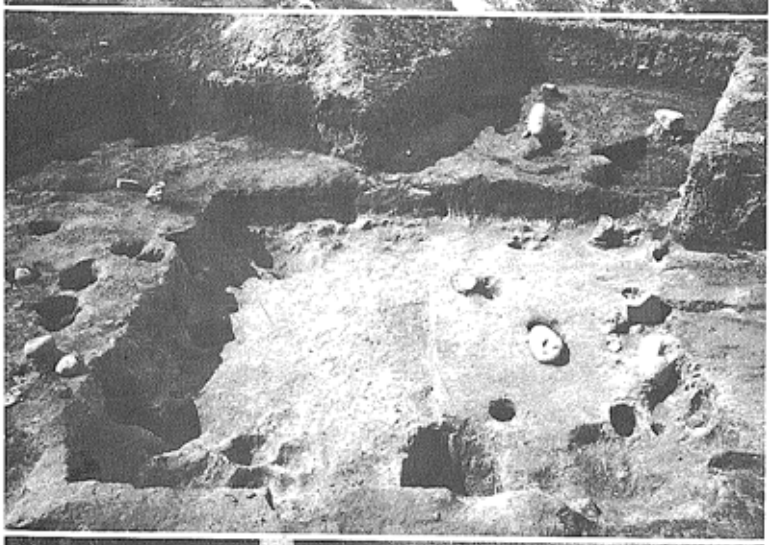
その他の遺構



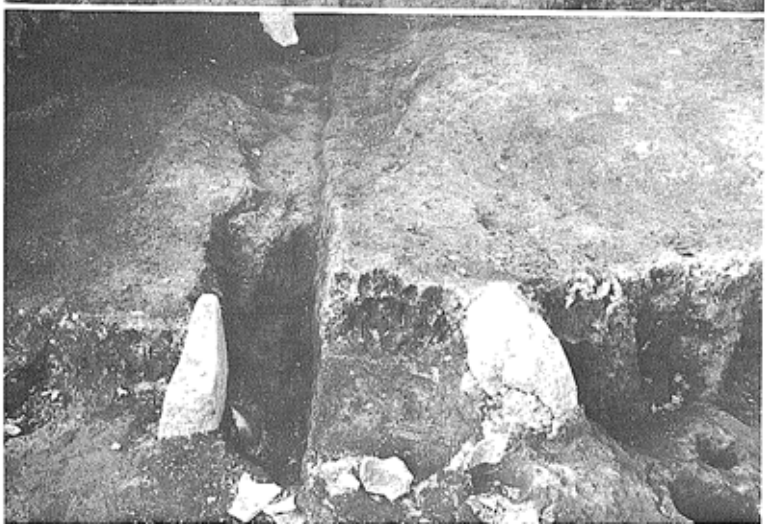
図版21



第１号住居跡



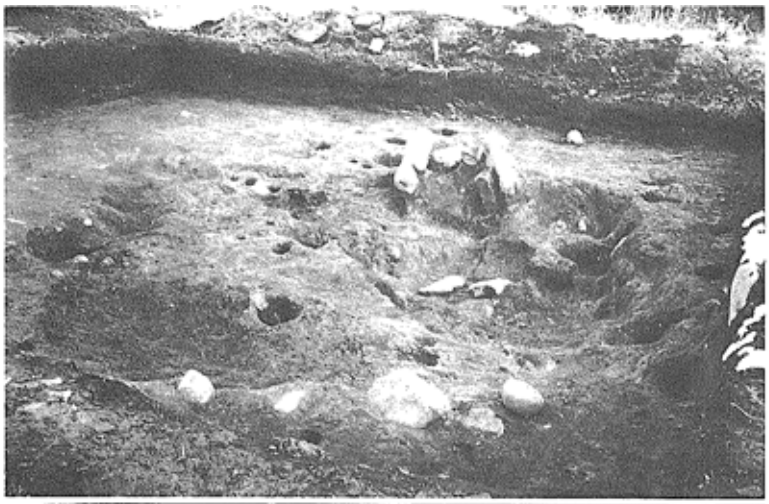
第１号住居跡立ち割り
状況



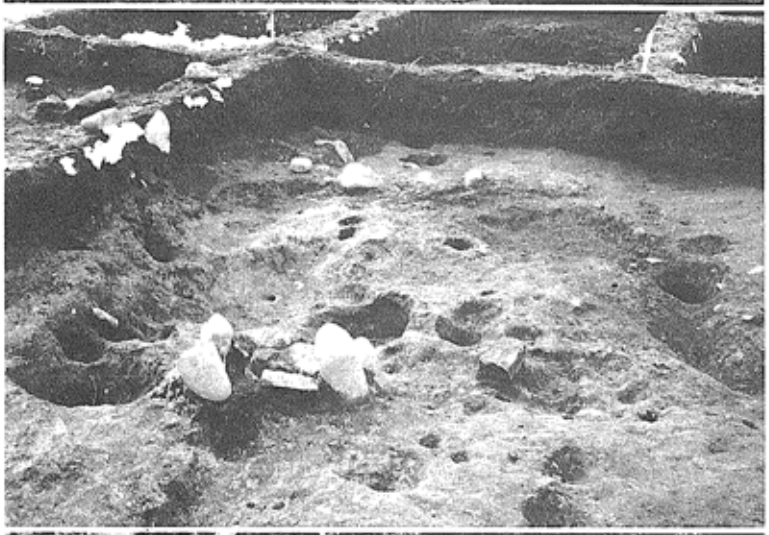
第１号住居跡カマド立ち
割り状況

図版22

第２号住居跡



第２号住居跡



第２号住居跡カマド

図版23

第３・５号住居跡

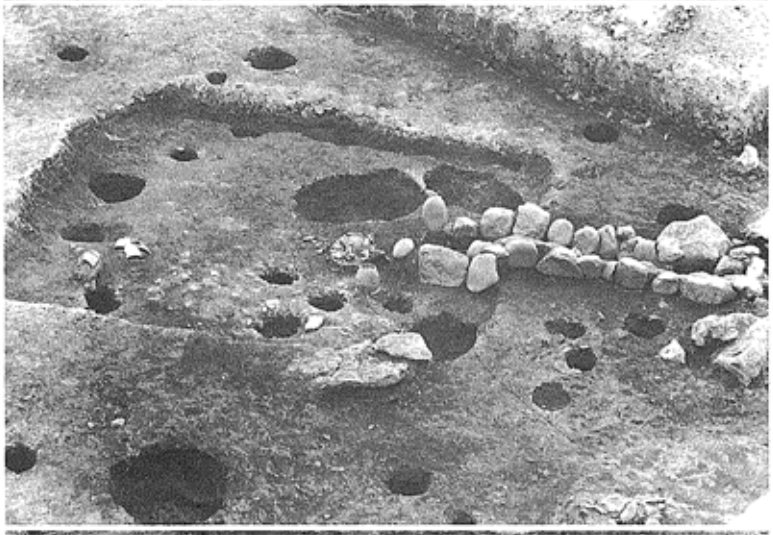
第３号住居跡

第３号住居跡カマド

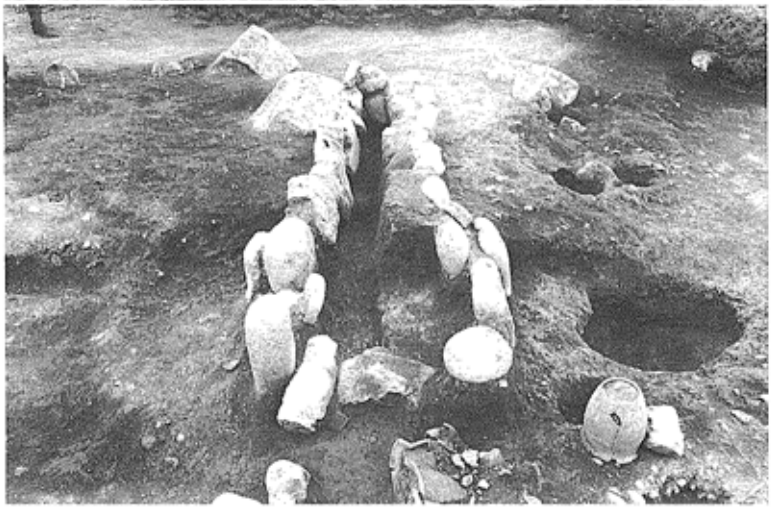
図版24

第５号住居跡

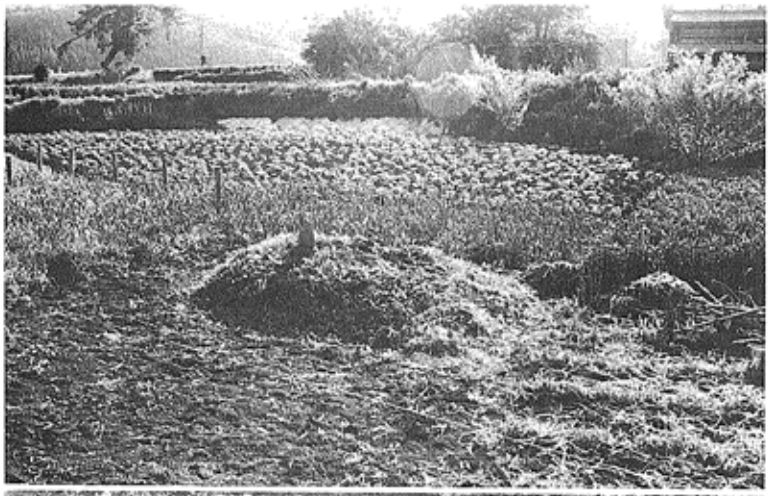
第５号住居跡



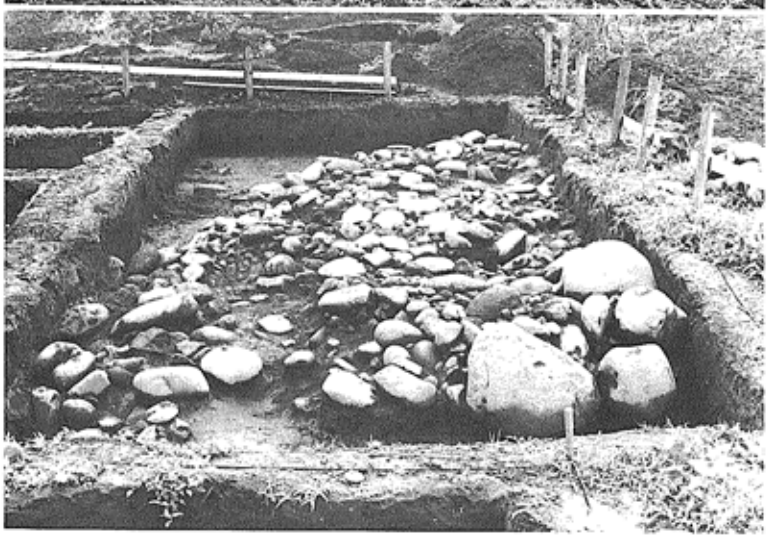
第５号住居跡カマド



図版25



塚



第３号石組遺構

図版26